

琉球大学学術リポジトリ

詠み歌琉歌の基礎的研究 『琉球新報』 『沖縄毎日新聞』 に掲載された大正期の琉歌

メタデータ	言語: 出版者: 前城淳子 公開日: 2009-06-12 キーワード (Ja): 琉歌, 詠み歌, データベース, データベース化, 節組琉歌集 キーワード (En): 作成者: 前城, 淳子, Maeshiro, junko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/10907

資料編

「近代琉歌集・大正編」

凡例

一 本資料は大正期の『琉球新報』『沖繩毎日新聞』に掲載された琉歌の集成を試みたもので、『近代琉歌の基礎的研究』の続編をなすものである。

二 『琉球新報』は明治二六年九月一五日創刊、『沖繩毎日新聞』は明治四一年一二月一〇日創刊である。但し、『琉球新報』は明治三二年四月一日付から大正七年五月三一日付まで、『沖繩毎日新聞』は明治四二年二月二八日付から大正三年一二月三一日付の紙面がまとまって残されている他は部分的にしか保存されていない。今回は『琉球新報』の大正元年九月から大正七年一二月まで、『沖繩毎日新聞』の大正元年九月から大正三年一二月までの新聞掲載琉歌を集成した。

三 両紙における琉歌の掲載の形態は(1)結社詠(結社単位で新聞に発表されたもの)、(2)琉歌大会詠(琉歌大会で詠まれた詠草が新聞に発表されたもの)、(3)募集歌(新聞社側がテーマや歌題を出題して募集したもの)、(4)寄稿歌(個人または結社以外の単位で発表されたもの)、(5)その他(記事の中で引用された古歌や読者投稿欄に掲載されたもの)の五つに分けることが出来る。本資料では(1)から(4)までを収録した。

四 本資料では(1)結社詠、(2)琉歌大会詠、(3)募集歌、(4)寄稿歌の分類ごとに新聞へ掲載された日付順に配列した。『琉球新報』と『沖繩毎日新聞』で同じ日に掲載されている場合は『琉

球新報』に掲載されたものを先にし、『沖繩毎日新聞』に掲載されたものを後に配列した。

五 『琉球新報』と『沖繩毎日新聞』の両紙に重複する琉歌があるが、そのまま収録した。

六 本文及び関連する項目には以下のものがあり、それらを次のように配列した。

- ①掲載紙の日付
- ②掲載紙名
- ③掲載号
- ④掲載欄名
- ⑤結社名
- ⑥開催日
- ⑦歌題
- ⑧兼題・当座
- ⑨選者・点者名
- ⑩判定・評価
- ⑪作者名
- ⑫本分

募集歌や寄稿歌には結社名やそれに関わるいくつかの項目を欠く。また結社詠、琉歌大会詠の場合でもすべての項目が掲載されているわけではない。

七 新聞では日付や掲載号を「大正元年九月十一日 第四千四百三十二号」のように表示しているが、ここでは「大正元年九月一日 第四四三三三号」のように示した。

八 掲載新聞名は『琉球新報』を「新報」、『沖繩毎日新聞』を「沖毎」と略記した。

九 本文には(1)結社詠、(2)琉歌大会詠、(3)募集歌、(4)寄稿歌の各分類ごとに算用数字で歌番号を付した。

十 新聞では琉歌を上句下句の二行に分けて掲載する場合と、一行書きの場合とがあるが、ここではすべて一行書きに改めた。

十一 全般にわたって旧漢字は新漢字に、異体字、俗字などは本字に改めることを原則とした。但し、作者名のような固有名詞は新聞に掲載された表記のままとした。

十二 変体仮名は現行の平仮名に改めた。

十三 「ゝ」「ゞ」「々」「く」などの踊り字が用いられているが、ここでは該当する文字を記し、踊り字は用いなかった。

十四 印字が不鮮明で読めない場合はその文字数を「□」で示し、文字数が分からない場合は「」で示した。

十五 後日紙面で本文等の訂正がなされた場合はその記載にしたがつて訂正したが、特に注記はしていない。

十六 「全人」「全上」のように作者名や結社名、歌の評価などを略記することがある。その日の紙面で該当する情報がわかる場合は該当する情報を記したが、わからない場合は新聞に記載されたまま「全人」「全上」とした。

十七 選者・点者が複数名いる場合、新聞では

仲濱 政模
比嘉 賀慶 共撰

のように記載されるが、ここでは「比嘉賀慶 仲濱政模共撰」のように一行書きに改めた。

十八 ルビがふられている箇所があるが、ここでは省略した。但し省略することによってよみが分からなくなると思われるものはその文字の下に（ ）でそのルビを示した。「哀（なつ）かしやの」「長命（ながら）へて」など。

1 結社詠

大正元年九月一〇日付「沖毎」第一三三二号

燕居会 明治四十五年七月 羽地村

見恋 兼題 諸見里朝奇選

天 岩木

1 むたなれはのよてわきも焦れゆか思て自由ならぬ恋の重ひ

地 艾叟

2 ものみ顔しちゆる花のおみ重ひ一目見ちやる姿忘れ苦しや

人 狂犬

3 浮世名にたちゆる花□思童ひ一目むちやる顔の忘れ苦しや

大正元年九月一日付「沖毎」第一三三三号

羽地村燕居会 九月四日

新樹 兼題 諸見里朝奇選

艾叟

4 若葉さしそへて日のかけも漏らぬ遊ておもしろさ庭の木陰

銀月

5 端山からつつき深山おくまでも若葉さしそへてもたい清さ

岩木

6 庭にもてなきやる松とかつまるのみとりさしそへて榮るうれし

や

大正元年九月二日付「沖毎」第一三三四号

垣花琉歌会

六日夜 点者伊江朝重大人

天 花城朝忠

7 妻むかひ舟の思ひ真帆かけて夜明まちなねら天の美星

地 花城朝忠

8 しちや誰か知ゆか明□や川渡る期りまつ星の夜半の□ひ

人 崎濱朝□

9 機たゆる姫やをさ□声もとめてあける夕待ら河のほとり

大正元年九月一六日付「沖毎」第一三三七号

垣花琉歌会

蓮如君子 当座 点者伊江朝重大人

地 神山處如

10 誠ある人の胸の玉こころ濁りても附かぬ池□蓮

地 浦添朝長

11 濁りにも染ぬ池の花蓮心すむ人に恥やかかぬ

人 浦添朝長

12 ますく立並らで清らく咲く蓮誠ま□人の姿さらぬ

大正元年九月一七日付「沖毎」第一三三八号

垣花琉歌会

見形厭恋 点者伊江朝重大人

天 浦添朝長

13 音にきくの花たつねやい見ればこころ秋風の吹よ起て

天 浦添朝長

14 色香ないぬ花や綾蝶たいんすそわなとひもとる浮世たいもの

地 高江洲昌壯

15 縁のよしあしや心てやり言ちもきやしゆか結らぬ姿見れば

16 見れはとしへたる海士の捨小舟いきやしのられゆか恋のはてに
地 山里守祥

人 花城朝忠

17 見ちゆて恋しさの心真帆かけてくれは浦風の秋になたさ

人 高江洲昌壯

18 □□□やすかはき形のわるさいきやし□られゆか□□□

大正元年九月二五日付「沖毎」第一三三五号

垣花琉歌会

月前旅泊

点者伊江朝重大人

天 吉里眞仁

19 月やはるはると照り渡て行ひ我身やつれなかる浦のとまり

地 浦添朝長

20 なれぬ浦泊夢もむすはらぬ思ひかたふちゆる月に照らち

地 高江洲昌壯

21 とまや草むしる梶枕しちゆて浦の月なかむ秋の今宵

人 吉里眞仁

22 照る月に雁のとひ渡て行けは浦泊る我身やつらさ増しゆさ

大正元年一〇月三日付「新報」第四四五三号

奥武山歌会

並枕語恋

兼題

伊江朝眞大人撰

仁 翁長良才

23 枕並とて積るとし月の思ひかたらゆる節もあたま

義 大濱政通

24 いく年よへてもかはるなやう互に枕並とて契りしちやす

25 枕並とて語る夜や互に嬉しやなつかしやの袖とぬらす
礼 翁長良才

智 湖城恵宏

26 隔てないんことに枕近寄れ積るむねうちの思ひ語ら

信 浦添朝長

27 枕並やひ終夜かたて語れつくさらぬ二人が思ひ

秀逸 上江洲由壽

28 夢か現か里御側枕並とてかたる今宵

秀逸 吉里眞仁

29 おみちやけもすらぬ枕並とて思ひ語ゆす夢のここと

秀逸 湖城恵宏

30 おみちやけもすらぬ枕並とて思ひ語ゆす夢のここと

佳調 高安朝常

31 稀の振合に枕並とてあかぬ語らゆす夢のここと

佳調 渡慶次朝宣

32 枕並とていちやるい言葉やいつもかわるなやう肝にとめて

佳調 當銘朝顛

33 枕並とて語らいつくさらぬあはれ思ことやいつものこて

大正元年一〇月四日付「新報」第四五四号

奥武山歌会

独見月

兼題

伊江朝眞大人撰

仁 神山盛蕃

34 一人しみしひと月よ詠れはむねにも思の種子と蒔る

義 大山朝眞

35 友のともをれば秋のかなしさも忘れて詠ゆる十五夜やすか

- 36 名に立る十五夜いつよりもさやか一人詠ゆる夜半のつらさ
礼 佐久本孟教
- 37 與所や詠とてももきいち延らわみや照る月に物よ思て
智 松島朝京
- 38 照り清さあても一人詠れば物と思ましゆる夜半の御月
信 川平惠許
- 39 一人詠れば秋のものおみのつれなさど増る夜半の御月
秀逸 上江洲由壽
- 40 与所やうちよらて詠ゆら今宵わみやたた一人月に向て
秀逸 兼濱朝珂
- 41 戸はあけて一人詠れば月のこころきよ水の山のいほり
佳調 仲濱政模
- 42 去年のなま時分詠たる人の思影やけふの月にのこて
佳調 糸満朝庸
- 43 ののさひもならん月と伽なゆる浮世かたすみの草のいほり
点者
- 大正元年一〇月四日付「沖毎」第一三四四号
奥武山歌会
- 44 一人しみしみと月よ詠ればむねにも思の種子と蒔る
仁 伊江朝眞大人撰
義 神山盛蕃
- 45 友のともをれば秋のかなしさも忘て詠ゆる十五夜やすか
礼 大山朝眞
- 46 名に立る十五夜いつよりもさやか一人詠ゆる夜半のつらさ
礼 佐久本孟教

- 47 与所や詠とて百氣いち延らわ身や照る月に物よ思て
智 松島朝京
- 48 照り清さあても一人詠れば物と思はしゆる夜半の御月
信 川平惠許
- 49 一人詠れば秋の物思のつれなさど増る夜半の御月
透逸 上江洲由壽
- 50 与所やうちよらて詠ゆら今宵わみやたた一人月に向て
透逸 兼濱朝珂
- 51 戸はあけて一人詠れば月のこころきよ水の山のいほり
佳調 仲濱政模
- 52 去年のなま時分詠たる人の思影やけふの月にのこて
佳調 糸満朝庸
- 53 ののさひもならん月と伽なゆる浮世かたすみのくさのいほり
点者伊江朝眞
- 大正元年一〇月四日付「沖毎」第一三四四号
垣花琉歌会
- 54 峰の松風や世のちりも払て心しつめゆさ朝も夕も
松風 当座 点者伊江朝眞大人
天 浦添朝長
- 55 新西吹おこる秋風にたいんす静きかれゆる秋の葉音
地 勝連貞
- 56 峰の高松のこつゑ吹口や琴の音のことにひひくしほらしや
人 神山處如
- 大正元年一〇月七日付「沖毎」第一三四七号

奥武山歌会

並枕語恋 兼題

伊江朝眞大人撰

仁

枕並とて積る年月の思ひかたらゆる節もあたま

翁長良才

義

いく年よへてもかはるなやう互に枕並とて契りしちやす

大濱政通

礼

枕並とて語る夜や互に嬉しやなつかしやの袖とぬらす

翁長良才

智

隔てないんことに枕近寄れ積るむねうちの思ひかたち

湖城惠宏

信

枕並やひ終夜かたて語れつくさらぬ二人か思ひ

浦添朝長

秀逸

夢か現か里御側枕並とてかたる今宵

上江洲由壽

秀逸

おみちやけもすらぬ枕並とて思ひ語らゆす夢のこことち

吉里眞仁

秀逸

たみちやけもすらぬ枕並とて思ひかたらゆる夢のこことち

湖城惠宏

佳調

稀の振合にまくら並とてあかぬ語らゆす夢のこことち

高安朝常

佳調

まくら並とていちやるい言葉やいつもかはるなやう肝にとめて

渡慶次朝宣

佳調

まくら並てもかたらいつくさらぬあはれ口こことちやいつものこて

當銘朝顯

日曜会

屋嘉比政兄

68

桃山の行幸みちみちの草の露や御万人のなみたさらめ

糸満朝庸

69

をかてなつかしや御慈悲ある君の美代の御栄もすてていまいす

糸満朝庸

70

数多御万人の心つくすはもおよしみもならぬ今日の行幸

糸満朝義

71

かむあかりめしやうち世界や物音もたえて明け暮も袖よぬらち

高安朝常

72

幾千年までもおかけほさへめしやひる御万人の願もあたになた
め

伊江朝薫

73

御引とめならぬ行幸さめとめは御万人のまきり袖よぬらち

諸見里朝奇

74

あをくわか君や雲かくれみしやうち御万人のまきり袖よぬらち

大山朝眞

75

朝夕御万人も袖とぬらしひやるこの世ふりすてて行幸みしやす

大山朝眞

76

あをくわか君や雲かくれみしやうち朝夕御万人や袖とぬらす

浦添朝長

77

天照らすおてた雲かくれみしやうち御万人の心闇のこことち

岸本賀雅

78

なからへてをてものしゆかわか君やまたと拜まらぬ行幸みしや
うち

79 あたらかなし桃山の行幸御引とめららぬ袖とぬらす

知念政置

80 神あかりめしやうちみ空尋てもみかけさへをかむ方もないらぬ

大正元年一〇月九日付「沖毎」第一三四九号

燕居会

大正元年十月三日

羽地村字眞喜屋

残暑

九月兼題

点者諸見里朝寄大人

一

瀬石

81 いつからか新西吹送て呉ゆら夏よりもまさる屋のあつさ

二

瀬石

82 節やたちかはて秋になてをすか夏にいやましゆる屋のあつさ

三

翠董

83 夏も暮すてて秋になてをすか真昼まの□つさくらし苦しや

四

珀雲

84 すき去りし夏の名残さめ朝夕あつさ身にしめて暮し苦しや

四

珀雲

85 秋になてをすか夏よりもまさて朝夕さもあつさ暮し兼て

五

銀月

86 秋になてをてもかねあつさあすか鷹わたし新西いつか吹ゆら

六

銀月

87 秋の節やすか夏よりも増て真昼まのあつさ暮し苦しや

七

翠董

88 秋んてといふすかあまりとくあつさ朝夕はなさらぬ久葉の団羽

大正元年一〇月一四日付「沖毎」第一三五四号

垣花琉歌会

曉月

撰者伊江朝重大人

天

仲濱政模

89 無蔵かさしくし□曉の空の月に覚出しゆさ花のむかし

地

浦添朝長

90 曉のかねのひひく山寺の高松にかかる月のかつら

人

伊集治令

91 見ればちやかなさや山の端にかかて照月のかげのうすくなゆす

大正元年一〇月一五日付「新報」第四四六五号

奥武山歌会

諒閣

兼題

伊江朝眞大□撰

勝連貞

92 雲の□かくれに世界やとなど物音もたえて袖とぬらす

山里守祥

93 仰くわか御主や神あかりみしやうちいきやし暮しゆか上も下も

山里守祥

94 ふたつ無ぬ御日雲かくれみしやうち衾れ上下も袖□ぬらす

山城宗得

95 千代八千代かけて御願しやる御主も衾れ雲の上にかくれめしや

うち

佐久本孟教

96 御恵の雲や御万人の顔にかみていく千代の御願しやすか

稲福全名

97 都から田舎物音もたえて笑ひ顔しちゆる人やをらね

渡慶次朝宣

98 神さりし君の御名残にかかる四方の民草の露のしけさ

99 たとへ桃山に御かくれになても世々に御万人やあをき拜む
渡慶次朝宣

具志頭朝重

100 天加那志雲に御かくれよみしやうち民のかなしみや限りないさ
め
野崎眞秀

野崎眞秀

101 をかてなつかしや神上よみしやうち朝夕さも袖に露とうちゆる

森田孟徳

102 御慈悲ある君やこの世すてみしやうちなけき悲まぬ人やないさ
め
大正元年一〇月二四日付「新報」第四四七三号

奥武山歌会

牛 兼題

牛 兼題

伊江朝眞大人撰

仁

比嘉賀徳

103 主のため朝夕田畑すきくなち五穀みのらしゆす牛のいさを

大正元年一〇月二四日付「新報」第四四七三号

奥武山歌会

牛 兼題

伊江朝眞大人撰

義

稲福全名

104 畜生てやりともてあまりふちうとな牛や小山田のたからたいも
の
礼
伊江朝英

礼

伊江朝英

105 浮世もの事やあまりあしかくな車引き歩む牛のことに

智

湖城恵宏

106 田畑耕ちゆて貢をさめゆる田舎山原やうしとたのむ

信

伊江朝薫

107 翁の飼牛やなさちやらや呉ゆら田畑すきかへちいさみたちゆさ

秀逸

具志頭朝重

108 野飼しある牛をつなち置けわらへ田畑鋤くなす節もなとい

秀逸

屋嘉比政兄

109 すきかへしかへし耕しゆす見れば牛や小山田のたからさらめ

秀逸

花城朝忠

110 頼しや牛の厭ひかほないらん田畑鋤きまとおも荷ひきやい

佳調

高江洲昌壯

111 野飼牛たいんす人の志情になれて働ちゆる浮世やすか

佳調

翁良良才

112 あまた人人口乳口搾口吞す牛と世の中のたからさらめ

点者

点者

113 貢ささけてもあまりあるとしや重荷ひく牛のはたの美さ

大正元年一〇月二五日付「沖毎」第一三六四号

日曜会

十月

寄秋述懐

兼題

仁

渡慶次朝宣

114 思尽すこともならぬいたつらににやまたのこの年も秋になため

義

久志安均

115 木草みの結ふ秋になるまでものかす実やならぬ我身の仕事

礼

當銘朝穎

116 月のかつらの雫かや詠めれば袖に露のかかる

智

佐久本孟教

- 117 月も紅葉も詠れは詰ていらぬ物思みの種子となたさ
信 糸満朝庸
- 118 物よおもはしゆる秋になてからや黒髪に霜のしげくおきやさ
秀 知念政置
- 119 紅葉かりしちも月よ詠ても忘ららぬものや秋の思ひ
秀 松嶋朝京
- 120 胸に物思みは秋の夜の月も涙にかき曇て伽やならぬ
秀 糸満朝義
- 121 秋になて朝夕思みはなつかしやにや又此の年も半すくち
佳 兼嶋景福
- 122 ひるや紅葉かり夜や月詠めたた遊てわすら秋のおもひ
佳 高安朝常
- 123 雲きりも晴て秋の夜の月のすみることわきもみかき見ふしや
佳 知念棚敦
- 124 秋の七葉も老の身になれば物よ思はしゆる種子となゆる
大正元年一〇月二七日付「沖毎」第一三六六号
日曜会 十月廿三日
- 125 三十三夜 当座 点者伊江朝眞大人撰
仁 吉里眞仁
- 126 みちたらぬ月の光り照り渡て十五夜よりまさる後の今宵
義 仲濱政模
- 127 あかぬ詠ゆさ御慈悲ある君の美代のなか月の影の美さ
礼 松嶋朝京
- てかやう思わらへ伊佐浜に下りて名に立る後の御月拝ま
智 嵩原安光

- 128 杯にうつる月影よ見ちもまこと名に立る後の今宵
秀 松嶋朝京
- 129 雲の飛御衣もちりて跡ないらぬかはて照り清さ後の今宵
秀 知念政置
- 130 かたることの葉も酌みかはす酒も月に匂ましゆさ後の今宵
佳 仲濱政模
- 131 豊む三五夜の月よりもまさて美かけ照り清さ後の今宵
佳 糸満朝義
- 132 名に立る月もこれまでよともてかはて照りみしやら後の今宵
点者 伊江朝眞
- 133 庭のしらきくの花にいろそへて十五夜より勝るけふの御月
大正元年一〇月三〇日付「新報」第四四七九号
日曜会 十月廿二日
- 134 三十三夜 当座 点者伊江朝眞
仁 吉里眞仁
- 135 みちたらぬ月の光り照り渡て十五夜よりまさる後の今宵
義 仲濱政模
- 136 あかぬ詠ゆさ御慈悲ある君の美代のなか月の影の美さ
礼 松嶋朝京
- 137 てかやう思はらへ伊佐浜に下りて名に立る後の御月拝ま
智 嵩原安光
- 138 杯にうつる月影よ見ちもまこと名に立る後の今宵
秀 松嶋朝京
- 雲の飛御衣もちりて跡ないらぬかはて照り清さ後の今宵
秀 知念政置

139 かたることの葉も酌みかはす酒も月に匂ましゆさ後の□宵

佳 仲濱政模

140 豊む三五夜の月よりもまさて美かけ照り美さ後の今宵

佳 糸満朝義

141 名□立る月もこれまでよともてかわ□照りみしやら後の今宵

点者伊江朝眞

142 庭のしらぎくの花にいろりへて十五夜よりまさ□けふの御月

大正元年一〇月三一日付「新報」第四四八〇号

日曜会

寄秋述懐 兼題

仁 渡慶次朝宣

143 思尽すこともならないたつらににやまたこの年も秋になため

義 久志安均

144 木草みの結ふ秋になるまでものかすみやならぬ我身の仕事

礼 當銘朝穎

145 月のかつらの雫かや詠めれば袖に露のかかる

智 佐久本孟教

146 月も紅葉はも詠れば結ていらぬ物思みの種子となたさ

信 糸満朝庸

147 物よおもわしゆる秋になてからや黒髪に露のしけくおきやさ

秀 知念政置

148 紅葉かりしちも月よ詠ても忘すららぬものや秋の思ひ

秀 松島朝京

149 胸に物思みは秋の夜の月も涙にかち曇も伽やならぬ

秀 糸満朝義

150 秋になて朝夕思みはなつかしやにや又此の年も半すくち

佳 兼島景福

151 ひるや紅葉かり夜や月詠めたた遊てわすら秋のおもひ

佳 高安朝常

152 雲きりも晴て秋の夜の月のすみることわきもみかき見ふしや

佳 知念棚敦

153 秋の七草も老の身になれば物よ思わしゆる種子となゆる

大正元年一〇月三一日付「沖毎」第一三七〇号

燕居会

寄梅祝 兼題

仁 狂犬

154 御祝事つくくしるしさめ梅のいつよりもことし句ひましゆす

義 櫻山

155 御祝事つくくしるしさめ今年庭にさく梅の句ひ増しゆす

礼 珀雲

156 よたかなる美代のしるしさめ梅のいつよりもことし句ひましゆす

智 艾史

157 長閑なる美代や世話こともないらん梅よ詠とて遊ふうれしや

信 瀬石

158 のの事も思ぬ梅よ詠とて遊てたのしにゆる御代のうれしや

大正元年一二月四日付「新報」第四四八四号

燕居会

寄梅祝 兼題

諸見里朝奇撰

- 159 御祝事つくくしるしさめ梅のいつよりもことし句ひましゆす
仁 狂犬
義 櫻山
- 160 御祝事つくくし□しさめ今年庭□さく梅の句ひ増しゆす
礼 珀雲
- 161 よたかなる美代のしるしさめ梅のいつよりもことし句ひましゆす
智 艾叟
- 162 長閑なる美代や世話こともないらぬ梅よなみ□て遊ぶうれし
や 信 漱石
- 163 の事も思ぬ梅よ詠とて遊てたのしにゆ□御代のうれしや
大正元年一月一七日付「新報」第四四九七号
燕居会 九月 諸見里朝奇選
- 164 いつからか新□ふき送て呉ゆら夏よりもまさる屋のあつさ
漱石
- 165 節やたちかわて秋になてをしか夏にいやましゆる屋のあつさ
翠董
- 166 夏もくれはてて秋になてをしか真昼まのあつさ暮し苦しや
珀雲
- 167 過去りし夏の名残さめ朝夕暑さ身にして暮し苦しや
珀雲
- 168 秋になてをしか夏よりもまさて朝夕さもあつさ暮しかねて
珀雲

- 169 秋になてをしかかねあつさあすか鷹わたし新西いつか吹ゆら
銀月
- 170 秋の節やし夏よりも増て真昼まのあつさ暮し苦しや
翠薫
- 171 秋んてるいふしかあまりとくあつさ朝夕はなさらぬ久葉の団扇
大正元年一月二日付「新報」第四五〇一号
日曜会 従門帰恋 兼題 点者伊江朝眞
- 172 涙白玉や裏の門にちらち身にあまる思ひつてもとる
仁 伊江朝薫
- 173 無情の門守にあわれ禁止られて約束の今宵戻る恨しや
義 鉢嶺清温
- 174 約束の時やたかてきやる罪か御門やしんつまで戻る恨しや
礼 美里朝珍
- 175 時違かしちやら御門やしんつまで逢ぬ□る夜の露のしけさ
智 名護朝直
- 176 恋し裏の門に約束やしちゆて逢ぬもとる夜のものも苦しや
信 鉢嶺朝温
- 177 御門やしんつまで歌声うち出ちも音信もないらぬ戻る恨しや
秀 名護朝直
- 178 逢ぬ戻る夜にうちまのきまのきわ肝あまかしゆさ門のすすき
秀 知念政置
- 179 御門までやきやすか逢ぬいたつらに戻るわか袖に月のやとて
秀 名護朝直

180 門守かをれば自由に拝らぬ衾れ立ち戻る夜半のつらさ
佳 大宜見朝隆

181 与所の目のしけさ御門や越ららぬあわぬいたつらに
佳 知念積昌

182 天竺のお門もあちゆんこといふすか里か門やつまてもとて泣き
佳 比嘉賀慶

183 稲口の光りお門にひきあてと越て拝まらぬもとて泣る
点者伊江朝眞

大正元年一月二日付「沖毎」第二三九一号
日曜会 十一月十日

184 涙白玉や裏の門にちらち身にあまる思ひ包てもとる
兼題 点者伊江朝眞
仁 伊江朝薫

185 無情の門守にあはれ禁止られて約束のこよひ戻る恨めしや
義 鉢嶺清温

186 約束のときやたかてきやる罪か御門やしんつまで戻る恨しや
礼 美里朝珍

187 とき違かしちやら御門やしんつまで逢ぬ戻る夜の露のしけさ
智 名護朝直

188 恋し裏の門に約束やしちゆて逢ぬもとの苦りしや
信 鉢嶺清温

189 御門やしんつまで歌声うち出ちも音信もないらぬ戻る恨しや
秀 名護朝直

190 逢ぬ戻る夜にうちまのきまのきわ肝あまかしゆさ門のすすき
秀 知念政置

191 御門までやきやすかあはぬいたつらに戻るわか袖に月のやとて
秀 名護朝直

192 門守かをれば自由に拝らぬあはれ立ち戻る夜半のつらさ
佳 大宜見朝隆

193 与所の目のしけさ御門や越ららぬあはぬいたつらに戻る恨しや
佳 知念積昌

194 天竺の御門もあちゆんてといふすか里か門やつまて戻て泣き
佳 比嘉賀慶

195 稲妻の光り御門にひきあてと越て拝まらぬ戻て泣る
点者伊江朝眞

大正元年一月二日付「新報」第四五〇二号
日曜会

196 わすり貝よひろい忘り草つてもわすてわすたらぬ我身のおもひ
恋 当座 点者伊江朝眞
天 渡慶次朝宣

197 野辺も山の端も打向るかたに面かけと名残つれて呉ゆめ
地 稻福全名

198 いつの間に誰かす種子や蒔き呉たか我肝まつふたる恋の千草
人 糸満朝庸

199 深山谷底の雪のかたまりかとける間もないらぬ我身の思ひ
仁 山城宗得

200 面かけの立は髪に雪つても肝や花の上の蝶ころ
義 知念政置

201 わ肝さみたれの糸の口とまいて結て呉やならねはなのわらひ
礼 高安朝常

- 202 瀧の水こころいきやしとめられかこころから湧る恋の泉
智 山川朝棟
- 203 浮世波風やちやほとあれらわん漕渡て見ほしや古利のわたり
信 山城宗得
- 204 朝夕まつふゆる肝の恋草やいつの間に誰すさねや蒔か
秀 糸満朝庸
- 205 衾れさめいつも面かけと名こり立増い増い我肝ひちゆす
秀 稻福全名
- 206 浮世ものことや忘れやしちも忘れぬものや恋路さらめ
佳 大山朝眞
- 207 忘れ貝ひるて忘れていしやすかゆくと思ひまざる無蔵か情け
佳 大宜見朝隆
- 208 花よなかめても月よなかめても話て思ひ増さるありか姿
伊江朝眞
- 大正元年一月二二日付「沖毎」第一三九二号
日曜会 十一月十日
- 211 衾れ梶枕かせ待る夜半にききも淋しさや浦の千鳥
礼 佐久本孟教
- 212 千鳥鳴く声に寝るめもさめてつらさいや増る磯の千鳥
智 鉢嶺清温
- 210 なれぬうら泊風まちゆる夜半の衾れしものや泊千鳥
義 當銘朝顕
- 209 なれぬうら泊なれしふる里の夢よおとろかす夜半の千鳥
仁 名護朝直
- 兼題 点者伊江朝眞
- 旅泊千鳥

- 213 まとろめんならぬ梶枕近くなきあかち呉な浜の千鳥
信 與那原良儀
- 214 千鳥なく声にまとろ目もならぬなれぬうら泊明しかねて
秀 高安朝常
- 215 磯の浪まくらつらさ身にのよて衾なき呉ゆか夜半の千鳥
秀 勢理客宗宣
- 216 嶋名残立るはつ旅のとまりつらさ増すものや夜半の千鳥
佳 久志安均
- 217 なれぬ浦泊り梶枕しちゆて聞もつれなさや浜の千鳥
佳 崎濱朝功
- 218 夢やわかおやの御側よてをたす呼おこち呉ため浦の千鳥
点者伊江朝眞
- 大正元年一月二五日付「沖毎」第一三九四号
日曜会 十一月十七日
- 219 忘れ貝よひるい忘り草つてもわすてわすららぬ我身の思ひ
天 渡慶次朝直
- 恋 当座 点者伊江朝眞
- 220 野辺も山の端も打ち向る方に悌と名残つれて呉ゆめ
地 稻福全名
- 人 糸満朝庸
- 221 いつの間に誰かす種子や蒔き呉たか我肝まつふたる恋の千草
仁 山城宗得
- 222 深山谷底の雪のかたまりかとける間もないらぬ我身の思ひ
義 知念政置
- 223 悌の立は髪に雪つても肝や花の上の蝶こころ

- 224 我肝さみたれの糸の口とまいて結て呉やならねはなのわらへ
礼 高安朝常
智 山川朝棟
- 225 灌の水こころいきやしとめられかこころから湧る恋の泉
信 山城宗得
- 226 浮世波風やらやほとあれらわん漕渡てみ□しや古利の渡り
秀 糸満朝庸
- 227 朝夕まつふゆる肝の恋草やいつのまに誰す種子や蒔か
秀 稻福全名
- 228 あはれさめいつも侘と名残立増ひ増ひ我肝ひきめす
佳 大山朝眞
- 229 浮世ものことや忘れやしちも忘れぬものや恋路さらめ
佳 大宜味朝隆
- 230 忘れ貝ひるて忘れていしゆすかゆくと思ひまさる無蔵か情け
点者伊江朝眞
- 231 花よ詠ても月よ詠ても詰て思ひ増さありか姿
大正元年一月二七日付「冲毎」第一三九六号
垣花琉歌会
- 232 色々の菊の花や咲わけて千代の匂□すひとつさらめ
天 撰者伊江朝重大人
菊花色々 当座 勝連貞
- 233 打笑ひ笑ひないろいろ□て姿匂しほらしや千代の小菊
地 花城□□
- 234 ませ内の菊の色々の花やいきやし綾蝶ゑらて吸ゆか
人 浦添朝長

- 235 なれぬうら泊なれしふる里の夢よおとろかす夜半の千鳥
義 當銘朝頼
- 236 なれぬ浦泊風まちゆる夜半の衾れしものや浦の千鳥
礼 佐久本孟教
- 237 衾れ梶枕風待る夜半にききも淋しさや浦の千鳥
智 鉢嶺清温
- 238 千鳥鳴く声に寝るめもさめてつらさいや増る磯の苦屋
信 與那原良儀
- 239 まとろめんならぬ梶枕近くなきあかち呉な浜の千とり
秀 高安朝常
- 240 千とりなく声にまとろ目もならぬなれぬ浦泊明しかねて
秀 勢理客宗宣
- 241 磯の浪まくらつらさ身にのよて衾なき呉ゆか夜半の千とり
佳 久志安均
- 242 島名残立るはつ旅のとまりつらさ増すものや夜半の千とり
佳 崎濱朝功
- 243 なれぬ浦泊り梶枕しちゆて聞もつれなさや浜の千りと
点者伊江朝眞
- 244 夢やわかおやの御側よてをたす呼おこち呉ため浦の千とり
大正元年二月一日付「新報」第四五二〇号

燕居会

十一月

旅恋 兼題

諸見里朝奇選

一

林永

宵もあかつきも忘る間やないらぬなれしふる里の無蔵か情け

二

漱石

旅与所島や月も思ひますかかみなつかしや無蔵か影のうつて

三

岩木

旅の上になれも忘る間やないらぬなれしふる里の無蔵か情け

三

漱石

別路の名残旅までもつれて夜々の草枕露とうちゆる

三

珀雲

振別てあとや朝夕ふる里の無蔵か情のきもにすかて

三

翠蓮

馴ぬ与所島の夜々の草枕かたつけて呉ゆる人やをらぬ

四

珀雲

なれし併や片時ものかぬ我きも焦れゆさ旅のそらや

四

狂犬

夕間暮になれは日数ふる里の思ひみたらしゆる旅のつらさ

五

艾叟

夢やきやうも無蔵とかよはさんすれはまどるめもすらぬ草の枕

五

櫻山

無蔵か併の旅のそらまでも列て朝夕さも忘れ苦しや

五

林永

日々の営に昼のまやわすて夜々に思尽す旅のつらさ

大正元年二月一日付「沖毎」第一四一〇号

奥武山歌会

十二月

寒月映雪 兼題

伊江朝眞大人撰

仁

野崎眞秀

庭につむ雪と光りあらそひてすみて照りわたる冬の御月

義

高良睦輝

いつよりも美さよかふしのくゆる雪の上にてゆる月のみかけ

礼

久志安均

寒さでもないらん雲の美衣はつて雪にめかかれる月のきよらさ

智

仲尾次盛孝

嶺に積む雪や花とおみなちようてつめて詠ゆさ夜半の御月

信

名護朝直

出て見てわらへすみわたる月の雪の花てらち光りましゆす

秀逸

山城宗蔭

白かねのことにつたるしら雪に光り輝ちゆる月のきよらさ

秀逸

屋嘉比政兄

火桶はなれても出て詠ゆさ月にいるまさる雪の光り

秀逸

阿波根朝祥

花の上に照ゆる月のかけよりも雪の上にてゆるかけの清さ

佳

仲濱政模

美雪ふりつもるしろかねの世界にすみわたる月のかけの清さ

佳

川平恵許

庭の白ら雪に照りわたる月や秋よりもかはてかけの清さ

佳

稻福全名

ほのほのとあける空とおみなちやさ雪にさえわたる月のみかけ

雪やふり詰て静なる夜半にすみて照りわたる月の清さ

点者伊江朝眞

大正元年二月二日付「沖毎」第一四二二号

奥武山歌会

十二月

筆 当座

伊江朝真大人撰

仁

高安朝常

268 かきなかつ筆の花にしられゆき一見たいんすむたぬ人のこころ

義

阿波根朝祥

269 かかんでやりすれば自由やまたならぬいつか花咲ちゆら筆のは

やし

礼

稲福全名

270 いつか我が筆の肝のままなやひ浮世句たてて花や咲ちゆら

智

諸見里朝奇

271 などの手のひたや与所におみなちゆて筆にとかけけるよしのあ

るひ

信

大宜見朝隆

272 朝夕手にとゆる筆に花咲ち世々に句たてて残しほしやの

秀逸

高安朝常

273 神代からつつき世々の有口もかきなかつ筆のあとに見ゆさ

秀逸

比嘉賀徳

274 僅かしの毛すちあつめたる筆のかきなかつことの算やしらぬ

秀逸

大宜見朝隆

275 うらめしやなどの手のひたや忘れて書くことに筆に科やかけて

佳調

大山朝眞

276 筆のあるよひにい言葉の花もかきなかつ世々に句ひ立さ

佳調

兼嶋景福

277 ひしりかしこきのいましめの文の世々になかれゆす筆のいさを

278

佳調

朝夕おみはまで踏分てみればはやて白雲の筆のはやし

点者伊江朝眞

279

硯なみたててかきなかつちをてもはなやさき呉らね筆のはやし

大正元年二月一四日付「新報」第四五二三号

奥武山歌会

筆 当座

伊江朝真大人撰

仁

高安朝常

280 かきなかつ筆の花にしられゆき一見たいんすむたぬ人のこころ

義

阿波根朝祥

281 かかんでやりすれば自由やまたならぬいつか花咲ちゆち筆のは

やし

礼

稲福全名

282 いつかわか筆の肝のままなやひ浮世句立る花や咲ちゆら

智

諸見里朝奇

283 などの手のひたや余所におみなちゆて筆にとかけけるよしのあ

るひ

信

大宜見朝隆

284 朝夕手にとゆる筆に花さかち世々に句たてて残しほしやの

秀逸

高安朝常

285 神代からつつき世々の有様もかきなかつ筆のあとに見ゆさ

秀逸

比嘉賀徳

286 僅かしの毛すちあつめたる筆のかきなかつことの算やしらぬ

秀逸

大宜見朝隆

287 うらめしやなどの手のひたや忘れてかくことに筆に科やかけて

288 佳調 大山朝眞
筆のあるよひにい言葉の花もかきなち世々に匂ひ立さ

兼島景福

289 佳調 諸見里朝奇
ひしりかしこきのいましめの文の世々になかれゆす筆のいさを

諸見里朝奇

290 点者
朝夕おみはまで踏分てみればはてや白雲の筆のはやし

点者

291 点者
硯なみたててかきなちをてはなやさき呉らね筆のはやし

大正元年二月一日付「新報」第四五二四号

奥武山歌会

寒月映雪 兼題

伊江朝眞大人撰

野崎眞秀

292 仁
庭につむ雪とひかりあらそひてすみて照りわたる冬の□月

高良睦輝

293 義
いつよりも美さよかふしのくゆる雪の上にてれる月の美かけ

久志安均

294 礼
寒さでもないらん雪の美衣はつて雪にみかかゆる月のきよらさ

仲尾次盛孝

295 智
嶺に積む雪や花とおみなちようてつめて詠ゆさ夜半の御月

名護朝直

296 信
出て見てわらへすみわたる月のゆきの花てらち光ましゆす

大正元年二月一日付「新報」第四五二五号

奥武山歌会

寒月映雪 兼題

伊江朝眞大人撰

297 秀逸 山城宗蔭
白かねのことにつたるしら雪に光輝ちゆる月のきよらさ

屋嘉比政兄

298 秀逸 阿波根朝祥
火桶はなれても出て詠ゆさ月にいるまさる雪の光り

阿波根朝祥

299 佳調 仲濱政模
花の上に照ゆる月のかけよりも雪の上にてゆるかけの清さ

仲濱政模

300 佳調 川平恵許
美雪ふりつもるしろかねの世界にしみわたる月のかけの清さ

川平恵許

301 佳調 稻福全名
庭のしら雪に照りわたる月や秋よりもかはてかけの清さ

稻福全名

302 点者
ほのほのとあける空とおみなちやさ雪にさえわたる月のみかけ

点者

303 点者
雪やふり詰て静なる夜半に澄て照りわたる月の清さ

大正元年二月二日付「冲毎」第一四二〇号

奥武山歌会

古寺 伊江朝眞大人撰

一番 左持 比嘉賀徳

304 右持 渡嘉敷通昆
間も淋しさや千歳ふる寺のたたく夕間暮の鐘のひびき

渡嘉敷通昆

305 左勝 高安朝常
間もさひしさや法の道芝もあれはてる寺の鐘のひびき

左下句のたたくと云ふ語は俗めきていかかとおもふ夕間暮の空とあらためていかん右法の道芝は法の師もをらぬとあらまほし左右聊かきつあり好き持と云ふべし

二番 左勝

高安朝常

306

世のちりもたたぬとしやふるてらにすみてきかれゆさ鐘のひびき

右

美里朝珍

307

見るかけもないらん深山古寺や軒端苔むすて幾世へたか
左申旨なし右見るかけもないらんの語は寺の見えぬ心地する
下句の軒端苔結と云ふに对照すれば矛盾と思ひ侍るるな
ふ左勝

三番 左

渡名喜良樹

308

聞もさひしさを夕間暮の空にたたく古寺のかねのひびき

右勝

比嘉春株

309

山らしとつれて聞も淋しさを峯の古寺のかねのひびき
左たたく古寺とは語氣貫かす年やふる寺□あらまほし右は
しらへ優美なり勝と定む

四番 左勝

大山朝眞

310

見れば山寺やあれはててをてもたたく鐘の音やいつもすめて

右

山城宗蔭

311

法の面影や石垣に残てとしゆふる寺や野原なとさ
左たたく鐘の音やは入相の鐘とあらためていかん右は古寺
の歌にあらて寥たる寺の跡を見てうたはれる心地する左勝
はいふまでもなし

大正元年二月二日付「新報」第四五三二号

奥武山歌会

古寺

一番左持

伊江朝眞大人選

比嘉賀徳

312

聞も淋しさを千歳ふるてらのたたく夕間暮の鐘のひびき

313

聞もさひしさを法の道芝もありはてる寺の鐘のひびき

右持

渡嘉敷通昆

左下句のたたくと云ふ語は俗めきていかかとおもふ夕間暮
の空とあらためていかん右法の道芝は法の師もをらぬとあ
らまほし左右聊かきつあり好き持と云ふへし

二番左勝

高安朝常

314

世のちりもたたぬ歳やふるてらにすみてきかれゆさ鐘のひびき

右

美里朝珍

315

見るかけもならん深山ふるてらや軒端苔むすて幾世へたか
左申旨なし右見るかけもないらんの語は寺の見えぬ心地す
る下句の軒端苔結と云ふに对照すれば矛盾と思ひ侍るるな
ふ左勝

三番左

渡名喜良樹

316

聞も淋しさを夕間暮の空にたたく古寺のかねのひびき

右勝

比嘉春株

317

山らしとつれて聞もさひしさを峯のふるてらのかねのひびき
左たたく古寺とは語氣貫かす歳やふるてらとあらまほし右
はしらへ優美なり勝と定む

四番左勝

大山朝眞

318

見れば山寺やあれはててをてもたたく鐘の音やいつもすみて

右

山城宗蔭

319

法の面影や石垣に残て歳ゆふる寺や野原なとさ
左たたく鐘の音やは入相の鐘とあらためていかん右は古寺
の歌にあらて廃たる寺の跡を見てうたはれる心地する左勝
はいふまでもなし

大正元年二月二日付「沖毎」第一四二二号

奥武山歌会

古寺

伊江朝真大人撰

五番 左

渡慶次朝宣

古寺になてもまつにふく風にすみて音信るかねのひひき

右勝

鉢嶺清温

寺や荒れはてて法の師もをらぬ衾れきくものや松の葉音

左古寺になてもは年やふる寺のまつにとあらまほしすみて

音信るはすみて音立るにあらためていかん古寺の景色目前

に浮ふ心地するろのふ勝

六番 左

高良睦輝

いくちとせへても法の御光やかはることないさめ山の御寺

右勝

知念續昌

間も淋しさや千年ふる寺の夕間暮にたちゆる鐘のひひき

左古寺の有様は見えず仏の威光をうたはれたるならん右夕

間暮にたちゆるは空とあらためたし此の番も右を勝と定む

七番 左勝

山城宗得

間もさひしさや夜嵐とつれてたたく山寺のかねのひひき

右

山里永昌

世のちりもたたぬかかる山寺にのりの道ふむる人とほとけ

左下句のたたく山寺は峯の古寺とあらまほし右は又古寺の

歌と思はれす深く仏道を修めし名僧をほめてうたはれしな

らん左勝たつころ勿論なり

八番 左持

兼嶋景福

あの山のおくにふる寺のあゆらしら雲のかかる塔の見ゆす

327

右持

稻福全名

あれはててをすか法の声やすめて今にしのはれる寺のむかし

左上句とのはすいく世ふる寺か山のいたたきとあらため

は聞ゆへし右法の声やすめてはいかかとおもふ立寄やひ見

れはあれはてておてもとあらまほし左右とも難あり持と定

めん

大正元年二月三日付「新報」第四五三二号

奥武山歌会

古寺

伊江朝真大人選

五番左

渡慶次朝宣

古寺になてもまつにふく風にすみて音信るかねのひひき

右勝

鉢嶺清温

寺や荒りはてて法の口もをらぬ衾れきくものや松の葉音

左古寺になてもは歳やふるてらまつにとあらまほしすみて

音信るはすみて音立るにあらためていかん古寺の景色目前

に浮ふ心地するろのふ勝

六番左

高良睦輝

いくちとせへても法の御光やかはることないさめ山の御寺

右勝

知念續昌

間も淋しさやちとせふるてらの夕間暮にたちゆるかねのひひき

左古寺の有様は見えず仏の威光をうたはれたるならん右夕

間暮にたちゆるは空とあらためたし此の番を右を勝と定む

大正元年二月三日付「新報」第四五三二号

琉歌研究会

343 波にくたけゆる月影やはねにかけて鳴渡る浜の千鳥
仲濱政模

342 波風もあれてあさるかたないさめちりちりにさわく浜のちとり
点者比嘉賀徳

341 頼む磯はたや浪あらさあためそらに鳴渡る夜半の千鳥
古堅榮秀

340 千鳥鳴声の衾り身にしめてかにもさひしき磯のとまや
比嘉賀忠

339 聞もさひしきや夕間暮のそらに友呼ひなきゆる浜の千鳥
饒平名智寶

338 かにもさひしき冬の口端や千鳥鳴声と朝夕聞る
饒平名智寶

337 一人寝のそらに聞もつれなさや妻よはひ鳴る浜の千鳥
喜瀬喜長

336 夕間暮とつれて鳴渡る千鳥頼む磯はたやあらしやため
古堅榮秀

335 磯のとまやとに聞くもさひしきや嵐吹つめる夜半の千鳥
山里景昇

334 頼む磯はたや宿ららぬあためそらに鳴渡る夜半の千鳥
山口全則

333 霞玉ちらすあら磯の千鳥寒さ身にしてみてわひて鳴ら
川平恵許

332 聞もつれなさや時雨ふる夜半にぬれて鳴くす浜の千鳥
川平恵許

千鳥 兼題 比嘉賀徳 仲濱政模共撰

349 寺やあれはてて法の声もきかぬかねの音と朝夕すみてなゆさ
左清のこるはすみて音立すとあらまほし右も鐘の音と朝夕
すみてなゆさはかねの音ときちゆる朝も夕さもとあらため
たし左右ともきつあ□□□たる様なれは持と申さむ
右持 具志頭朝香

348 法の師もをらぬあれはてる寺に清残るものや泉はかり
十一番 左持 當銘朝頼

347 とよむ山寺も今やあれはてて朝夕さもかねの音声はかり
左明暮といひ朝夕といひこと葉しらへおもしろからす□色
にくるしむ右も趣向陳腐のそしりはまぬかれかたきも先団
羽右に揚ん

346 峯の古寺や明け暮の鐘と法の声と聞る朝も夕さも
右勝 金武正宜

345 法の声も絶て年やふる寺にきくものや池のかはすひかい
左言葉のしらへ拙しくあれはててむしやすみるもはかなさ
や昔しからとよむ寺とやすかとあらためは先歌はれるへし
右も下旬朝夕きくものや池の蛙とあらためはいとおもしろ
し左右とも難だけれとこころ右にひかるる
十番 左 大宜見朝隆

344 見るも淋しさやあれはてて今にむかしなたかきやる寺のかたち
右勝 九番 左 屋嘉比政兄

345 奥武山歌会 伊江朝眞大人撰
森田猛徳

大正元年二月三日付「沖毎」第一四二二号

大正元年二月二四日付「新報」第四五三三三号

奥武山歌会

古寺

伊江朝真大人選

七番左勝

山城宗得

聞もさひしさや夜嵐とつれてたたく山寺のかねのひびき

右

山里永昌

世のちりもたたぬかかる山寺に法の道ふむる人とほとけ

左下句のたたく山寺は峯の古寺とあらまほし右は又古寺の

歌と思はれす深く仏道を修めし名僧をほめてうたはれしな

らん左勝たつこと勿論なり

八番左持

兼島景福

あの山のおくにふるてらのあゆらしら雲のかかる塔の見ゆす

右持

稻福全名

あれはててをすか法の声やすみていまにしのはれる寺のむかし

左上句とどのはすいく世ふる寺の山のいたたきにとあらた

めは聞ゆへし右法の声やすめてはいかかとおもふ立寄やひ

見ればあれはててをともあらまほし左右とも難あり持と

定めん

大正元年二月二四日付「沖毎」第一四二三号

奥武山歌会

古寺

当座

十二番 左

山川朝赴

ふむ人も絶てあれはててをともいつも名やくたぬ法のあとや

右勝

具志川朝及

法の師もをらぬあれはてる寺にしみてみるものや庭のかけひ

355

354

353

352

351

350

360

359

358

357

356

大正元年二月二五日付「沖毎」第一四二四号

奥武山歌会

古寺

当座

十五番 左

点者伊江朝真

佐久本孟教

いくちとしへたら奥山の寺やいつも暁の露にぬれて

左名僧の跡たえたる慨てうたはれたる心地する然し上句の

八字みねのふる寺やとあらため下句の法のあとやは法の昔

しとあらためは古寺の歌となるへし右すみて流れゆさとあ

らまほし玉にきつあれともひと涯面白をかし勝は云ふまで

もなし

十三番 左勝

山田有慶

こころ清みゆる法の声よ聞はあれはてる寺もきんの座敷

右

比嘉賀慶

みるも淋しさや残る山寺のかつら巻茂るかねのしふく

左仏の教を尊信して精神修養の功いちしるしくあらはる右

と雲泥のたか勝敗論をまたす右残る山寺のは年やふる寺

にとあらためかつら巻茂るはつたの ha ひかかるかねのしも

くとあらためたし

十四番 左勝

吉里真仁

幾年がへたらあれはてる寺やまれまれと聞さ法の音声

右

阿波根朝祥

鐘も法の声も松に音つれる軒端かたふちある山の御寺

左下句法の音声は法の声もとあらまほし右上句拙してとど

のはす法の声たいんすまれまれと立さとあらためはきこゆ

へし左右共きつあれとも勝は左にゆつるへき□

361 右勝 伊江朝薫
法の声もたえて幾年かへたら年やふる寺の本草あれて

左歌の意匠なし然しなから下句いつも□□に朽るをしさと
あらためは歌とならんか右本草は草葉とあらためたし右勝
とす

362 十六番 左持 仲濱政摸
見れはつれなさや月影ももれてしくれふるてらの法のひろま

363 右持 諸見里朝奇
たつねやい見れは幾世ふる寺の法のともし火もかすかなとさ

左右共言葉しらへよくとのえたりと云ふへし然し左□□
□しくれはいかかと思ひ侍る右も上句物たらぬ心地する此
処は優劣判しかたし持と定めん

364 点者伊江朝眞
年やふる寺の入相のかねにさそはれてちり□庭の木の□

大正元年二月三日付「新報」第四五四〇号
奥武山歌会

古寺 伊江朝眞大人選

十五番左 佐久本孟敷

右勝 伊江朝薫

366 法の声もたえて幾年かへたら年やふる寺の本草あれて

左歌の意匠なし然しなから下句いつれも雨露に朽るをしさと
とあらためは歌とならんか右本草は草葉とあらためたし右
勝とす

十六番左持

367 見れはつれなさや月影ももれてしくれふるてらの法のひろま

右持 諸見里朝奇
たつねやい見れは幾世ふる寺の法のともし火もかすかなとさ

左右共言葉しらへよくとのえたりと云ふへし然し左雜題
にしくれはいかかと思ひ侍る右も上句物たらぬ心地する此番
は優劣判しかたし持と定めん

369 点者
年やふるてらの入相のかねにさそはれてちりる庭の木の葉

大正二年一月五日付「沖毎」第一四三三号

燕居会 大正二年一月 諸見里朝奇選
水鳥 兼題 山之人

370 雪しものふてもあはれ水鳥の浦浦よめくてあさるつらさ

一 浪月

371 寒さ身にしめてくらさらんあてとさわし鳴ち飛ら浦のかもめ

二 狂犬

372 寒さ身にしめてくらさらんあてとよすか鳴渡る浦のかもめ

三 山之人

373 水鳥の習やゆきしものふても海川に下りてあさるつらさ

四 □石

374 きくもさひしさを夕間暮のそらに浦に飛さわく鴨の鳴声

大正二年一月九日付「新報」第四五四六号

燕居会 大正二年一月 諸見里朝奇選
水鳥 兼題

375 雪しものふても衾れ水鳥の浦浦よめくてあさるつらさ
一 山之人

二 銀月

376 寒さ身にしめてくらさらんあてとさわし鳴ち飛ら浦のかもめ
三 狂犬

四 山之人

377 寒さ身にしめてくらさらんあてとさわし鳴ち飛ら浦のかもめ
五 漱石

378 水鳥の習やゆきしものふても海川に下りてあさるつらさ

379 きくもさひしさや夕間暮のそらに浦に飛ひさわく鳴の鳴声

大正二年一月一日付「新報」第四五四八号

琉歌研究会 一月一日

車 兼題

比嘉賀徳 仲濱口摸共撰

一 川平恵許

380 小車のかげに都から田舎ゆきもとりもとり自由になたさ
二 古堅榮秀

三 古堅榮秀

381 車かり童急く路なかに俄か降り出ちやる雨も繁さ
四 古堅榮秀

五 眞榮里元璋

382 急きむち車かてく思童約束の友の待らたいもの
六 眞榮里元璋

七 眞榮里元璋

383 つれなさやわか身車挽たいんす日々の営やすらななゆめ
八 眞榮里元璋

九 眞榮里元璋

384 めくる小車のたよみないぬことに朝夕なにこともはたち見ほし
十 眞榮里元璋

や

点者比嘉賀徳

385 稲妻に車ひかち首里那覇もか□ときにかよる美代になたさ
点者比嘉賀徳

386 数百里の路□まかねちゆかけて車のかよる美代のうれしや
点者比嘉賀徳

387 のせてひく人もてひかす人もうき世小車のめぐりさらめ
点者仲濱政摸

388 色々の車見ちもしられゆさ日々にひらけゆく美代のさかり
点者仲濱政摸

389 いろいろの車年ことにまさてうき世お万人のためになたさ
点者仲濱政摸

大正二年一月一四日付「新報」第四五五二号

日曜会 一月

新年待友 兼題

点者伊江朝眞大人

一 糸満朝庸

390 汲たる若水にこころ新玉の年むかいてあそふ友と待る
二 高安朝常

三 高安朝常

391 新玉のとしやまなひ屋もやすてかるたとあそふ友とまちゆる
四 高良睦輝

五 高良睦輝

392 年の立つ朝にとその酒かこて待兼るものや歌の友部
六 渡慶次朝宣

七 渡慶次朝宣

393 としのわか水に若くなて友の嬉しかほしちゆていまひす待さ
八 美里朝珍

九 美里朝珍

394 わらんちやや揃て羽子つきゆて遊我身や屠蘇かさて友と待る
十 大山朝眞

十一 大山朝眞

395 新玉のとしや肝も若かへて嬉しこと語る友と待る
十二 山川朝赴

十三 山川朝赴

396 よよる年なみも共に忘りたる友よまち兼る年の初み

秀 屋嘉部政呈

397 世界やもの静御祝声もないらん友やちよん来らな年の始め

佳 稲福全名

398 いもりいはなしの花さかち遊は今日や初年の御祝てもの

佳 具志頭朝香

399 門松にそよく風の音信もつめて待ちかねる友ゆともて

佳 知念政置

400 いまんでの返事も聞なけな我身の出て門松のしたに立つさ

大正二年一月一四日付「沖毎」第一四四一号

日曜会 一月

新年待友 兼題 点者伊江朝眞大人

仁 糸満朝庸

401 汲たる若水にこころ新玉の年むかひてあそふ友と待る

義 高安朝常

402 新玉のとしやまなひやもやすてかるたとてあそふ友とまちゆる

礼 高良陸輝

403 年の立つ朝にとその酒かさて待ち兼るものや歌の友部

智 渡慶次朝宜

404 としのわか水に若くなて友の嬉しかほしちゆていまひす待さ

信 美里朝珍

405 わらんちやや揃て羽子つきゆて遊我身や屠蘇かさて友と待る

秀 大山朝眞

406 新玉のとしや肝も若かへて嬉しこと語る友と待る

秀 山川朝赴

407 よよる年なみも共に忘れたる友よまち兼る年の初め

秀 屋嘉部政呈

408 世界やもの静御祝声もないらん友やちよん来らな年の初め

佳 稲福全名

409 いもれいはなしの花さかち遊は今日や初年の御祝ていもの

佳 具志頭朝香

410 門松にそよく風の音信もつめてまちかねる友よともて

佳 知念政置

411 いまひんでの返事も聞なけな我身の出て門松のしたに立さ

大正二年一月一六日付「新報」第四五五三号

日曜会 大正二年一月十二日

竹雪 当座探題

勝 山川朝赴

412 庭の呉竹や雪に埋もれてやとるよすすみのさはき鳴さ

知念續昌

413 庭の呉竹につたる白雪やよかほいさなゆるしるしさらめ

当座探題

炉火 当座探題 名護朝直

勝

414 さくらすみいけてねやうちにおけは花やさかねとも春のこころ

佐久本孟教

415 雪霜やふても埋火のもとやさむさよそなしゆさ朝も夕さも

当座探題 比嘉賀慶

416 梅のはつ花や高殿の床に活て新玉の年よまたな

勝 糸満朝庸

417 深山鶯にしらさなや庭の春またぬ咲る梅の匂ひ
雪中鐘 当座探題

勝

山城宗得

418 雪やふり詰て静なる夜半にすみてきかれゆさ鐘のひひき

稲福全名

419 雪のふて野山うつもれてをてもうつまらぬものや鐘のひひき

大正二年一月一六日付「冲毎」第一四四三号

日曜会

一月

竹雪

当座探題

点者伊江朝真大人

勝

山川朝赴

420 庭の呉竹や雪に埋もれてやとるよすすみのさはき鳴さ

知念續昌

421 庭の呉竹につたる白雪やよかほいさなゆるしるしさらめ

爐火

当座探題

点者伊江朝真大人

勝

名護朝直

422 さくらすみいけてねやうちにおけは花やさかねとも春のこころ

佐久本孟教

423 雪箱やふても埋火のもとや寒さよそなしゆさ朝も夕さも

年内早梅

当座探題

点者伊江朝真大人

勝

比嘉賀徳

424 梅のはつ花や高殿の床に活て新玉の年よまたな

糸満朝庸

425 深山鶯にしらさなや庭の春またぬ咲る梅の匂ひ

雪中鐘

当座探題

点者伊江朝真大人

勝

山城宗得

426 雪やふり詰て静なる夜半にすみてきかれゆさ鐘のひひき

稲福全名

427 雪のふて野山うつもれてをてもうつまらぬものや鐘のひひき

初恋

当座探題

点者伊江朝真大人

勝

美里朝珍

428 今宵とふてしゆる恋の深山路にふみまゆてをたる人の心

比嘉賀徳

429 何事も親にあかすあてなしのあかさらん思ひむねにつつて

被厭恋

当座探題

点者伊江朝真大人

勝

山田口度

430 うちふられふられよるほと御側よてしはし拜めほしや

の

具志頭朝香

431 我身や思里かねちのちりこころうちはらひはらひすひもならぬ

大正二年一月一七日付「新報」第四五五号

日曜会

大正二年一月十二日

初恋

当座探題

勝

美里朝珍

432 今宵とふてしゆる恋の深山路にふみまよてをたる人のこころ

比嘉賀徳

433 何事も親にあかすあてなしのあかさらん思ひむねにつつて

被厭恋

当座探題

勝

山田有度

434 うちふられふられよるほと御側よてしはし拜めほしやの

具志頭朝香

435 わ身や思里かねやのちりころろうちはらひはらひすひもならぬ

大正二年一月一七日付「沖毎」第一四四四号

日曜会 一月十二日

寄海恋 当座探題 点者伊江朝真大人

勝 屋嘉比政兄

436 ふか海のそこもはてやあらずかはてもないんものや恋路さらめ

當銘朝頼

437 いきやかなていきゆら深海こき出ち浪にむまれゆる恋の小舟

名立恋 当座探題 点者伊江朝真大人

勝 渡嘉敷通昆

438 浮名たつ浪にぬれる身か袖やふすかたもないらんつくて鳴さ

阿波根朝祥

439 つげの枕かならへたら二人か身の上に浮名たちゆす

橋 当座 点者伊江朝真大人

勝 高安朝常

440 山にすむひとのやとやしら雲のわたるかけはしとしをりさらめ

大山朝真

441 すすむ世の中や舟にかよよたる川も橋かけて渡る嬉しや

暮村烟 当座 点者伊江朝真大人

勝 伊江朝薫

442 世果報としさらめ民草もよかてはんににきはゆる村の烟

兼島景福

443 夕間暮のそらにたちつつくけふり見しもしられゆさ村の栄え

竹雪 当座 点者伊江朝真大人

点者伊江朝真

444 竹やよよ直くふしのあるゆへと雪にうつもれていろやましゆる

大正二年一月一九日付「新報」第四五五六号

琉歌研究会 一月十五日

庭雪 兼題 比嘉賀徳 仲濱政模共撰

一 古堅榮秀

445 起て見て童夜明けしらしらと庭に降り積る雪の清さ

二 眞榮里元璋

446 宵の間にふたる庭の白雪や世果報しのくゆるしるしさらめ

三 川平恵許

447 待兼る梅の花と思みなちやさまし垣に積たる庭の美雪

四 山口全則

448 綿と思みなちやさ有明けのそらに音もないぬ降ゆる庭の美雪

五 饒平名智口

449 庭のまし垣につもる白雪やましかねる梅の花ゆともて

点者比嘉賀徳

450 おとつれる人にふましゆすもをしさあん清さ積たる庭の美雪

点者比嘉賀徳

451 みすとみて起て見るもうれしさや与果報しのくゆる庭の美雪

点者仲濱政模

452 なかめてもあかぬ五葉の松か枝に六つの花さちやる庭のけしき

点者仲濱政模

453 縦合庭おりてあそははんわらへ玉のこと光る雪やふむな

大正二年一月一九日付「新報」第四五五六号

日曜会 一月十二日

寄海恋 当座探題

勝

屋嘉比政兄

454 ふか海のそこもはてやあらやすかはてもないんものや恋路さら

め

當銘朝穎

455 いきやかなていきゆら深海こき出ち浪にむまれゆる恋の小舟

名立恋 当座探題

勝

渡嘉敷通昆

456 浮名たつ浪にぬれる身か袖やふすかたもないらんつくて鳴さ

阿波根朝祥

457 つけの枕かならへたら二人か身の上に浮名たちゆす

大正二年一月二〇日付「新報」第四五五七号

垣花琉歌会

新年鶯

一

点者上江洲由具大人 又吉長方

458 深山鶯も御掛ふさへ美代のはつ年よ仰きふける嬉しや

一

勝連貞

459 新玉の年のよろつよろこひややとる鶯の声にふくて

二

花城朝忠

460 心うちやかよさ年の明け明けにきなく鶯の千代のはつ声

二

神山處如

461 お門の松竹にきなくうくひすの声やよろこひの年のはしめ

三

花城朝忠

462 鶯のこえの匂やわか袖につつて嬉しさや年の初め

三

神山處如

463 新玉の年や籠のうくひすも初音しらへゆる声のしほ□しや

大正二年一月二〇日付「沖毎」第一四四七号

垣花琉歌会

新年鶯

一

上江洲由具大人 又吉長方

464 深山鶯も御掛ふさへ美代の初年よ仰きふける嬉しや

一

勝連貞

465 新玉の年のよろつよろこひややとの鶯の声にふくて

二

花城朝忠

466 心うちやかよさ年の明け明けにきなく鶯の千代のはつ声

二

神山處如

467 お門の松竹にきなくうくひすの声やよろこひの年のはしめ

三

神山處如

468 新玉の年や籠のうくひすもはつ音しらへゆる声のしほらしや

三

花城朝忠

469 鶯のこえの匂やわか袖につつて嬉しさや年の初め

大正二年一月二一日付「新報」第四五五八号

日曜会

橋

点者伊江朝眞大人撰 高安朝常

470 山にすむ人のやとやしら雲のわたるかけはしとしをりさらめ

大山朝眞

471 すすむ世の中や舟にかよよたる川も橋かけて渡る嬉しや

暮村畑

点者伊江朝眞大人撰

472 勝 伊江朝薫
世界報としさらめ民草もよかてはんににきはゆる村の畑

兼島景福

473 夕間暮のそらにたちつくけふり見もしられゆさ村の栄え

竹雪

点者伊江朝眞大人撰

点者伊江朝眞

474 竹やよ直くふしのあるゆへと雪にうつもれていろやましゆる

大正二年一月三日付「新報」第四五六〇号

垣花琉歌会

馴恋

点者上江洲由具大人

浦添朝長

475 誠真実のいかたれのうちにおひす馴染る糸の御縁

一

翁長良才

476 いつの間に我身や義理のませ越て里か志情に馴てむちやら

二

神山處如

477 こんなかひや御側お恥かしやあたす此の頃やなれて物と思ふ

三

山里守祥

478 日月へる程に御側なれそめて縁も志情もふくなゆさ

四

勝連貞

479 日月へることに縁も志情もなれそめていきゆさ二人か中や

大正二年一月三日付「沖毎」第一四五〇号

垣花琉歌会

馴恋

上江洲由具大人

浦添朝長

480 誠真実のいかたれのうちにおひす馴染る糸の御縁

二

翁長良才

481 いつの間に我身や義理のませ越て里か志情になれてむちやら

三

神山處如

482 こんなかひや御側御恥かしやあたす此の頃やなれてものと思ふ

四

山里守祥

483 日月へる程に御側なれそめて縁も志情も深くなゆさ

四

勝連貞

484 日月へることに縁も志情も馴染ていきゆさ二人か中や

大正二年二月五日付「新報」第四五七三号

琉歌研究会

二月一日

閑居雨 兼題 比嘉賀徳 仲濱政模共撰

一

川平恵許

485 思なしかやゆらかくれ住宿や軒端ふる雨の音もすみて

二

山口全則

486 浮世与所なちゆて暮す我か宿や降しける雨の音もしつか

三

眞榮里元璋

487 波の声も聞かぬ野辺の草宿やのきはふる雨の音もしつか

四

川平恵許

488 かたる人もをらぬかにもさひしさめ雨のふる庭の草のいほり

五

山口全則

489 心あて雨も音立て呉るな一人詫住の山の庵

六

喜瀬喜長

490 おとつれる人も居らぬ山宿に聞もさひしさや雨の音声

七

山口全則

491 淋しさとましゆる一人草宿にしみしみとふゆる雨の音声

八 山里景昇

492 一人山宿にかたる人も居らぬ間もさひしさや雨の音声

点者比嘉賀徳

493 世の塵ゆさけて暮す草宿や庭にふる雨の音もしつか

点者比嘉賀徳

494 わきもしみしみと降りつつく雨に静かもてなしゆる草のいほり

点者仲濱政摸

495 只にちちやうん一人暮す草宿に肝しらぬ雨のふゆるらめしや

大正二年二月一七日付「沖毎」第一四七四号

奥武山歌会

二月

浦鷺 兼題

点者伊江朝眞大人撰

仁

金武正宣

496 夕間暮とつれて飛立るさきの屋とや住吉のうらのまつか

義

高安朝常

497 住吉のうらの松の上に屋とるさきのひとむらやひり潮まちゆら

礼

嵩原安光

498 忍ふ狩人のをすやしらすきのの事もおまぬうらに遊て

智

野崎眞秀

499 や千町田かかし見守やひをためさきやひなつれてうらにをすか

信

久志安壽

500 音たててふたる雨も打はれて浦にしらすきのみの毛ふしゆさ

秀逸

大山朝眞

501 打寄る浪の花とおみなちやさうらのむらさきのゆきの衣

秀逸

兼濱朝珂

502 住吉のうらの松にゐるさきの雪の毛衣のいろの美さ

秀逸

具志川朝及

503 浦の平松にやとるむらさきの毛衣やゆきのつたるこごち

佳調

濱川順達

504 干潮にくたけよるなみの花とめはうらに飛ひはたるさきのつは

さ

505 うらのむらさきのひき潮待兼てしはし松原にとりてぬちゆさ

佳調

屋嘉比政兄

506 松間から見ゆるうらのむらさきの毛衣やなみの花よともて

佳調

花城朝忠

507 あさるさきむてよ業やおこたらぬうらの波風やあれてをても

点者伊江朝眞

大正二年二月一九日付「新報」第四五八六号

奥武山歌会

浦鷺 兼題

伊江朝眞大人撰

508 夕間暮とつれて飛立るさきのやとや住吉のうらのまつか

仁

金武正宣

509 住吉のうらの松の上にやとるさきのひとむらやひり潮まちゆら

義

高安朝常

510 忍ふ狩人のをすやしらすきのの事もおまぬうらに遊て

礼

嵩原安光

511 千町田かかし見守やひをためさきやひなつれてうらはをしか

智

野崎眞秀

512 音たててふたる雨も打はれて浦にしらすきのみの毛ふしゆさ

信

久志安壽

513 秀逸 大山朝眞
打寄る浪の花とおみなちやさうらのむらさきのゆきの衣

秀逸 兼濱朝珂

514 住吉のうらの松にゐるさきの雪の毛衣のいろの美さ

秀逸 具志川朝及

515 浦の平松にやとるむらさきの毛衣やゆきのつたるこち

佳調 濱川順達

516 干瀬にくたきよるなみの花とめはうらに飛ひわたるさきのつは

さ 佳調 屋嘉比政兄

517 うらのむらさきのひき潮まち兼てしはし松原にとりてゐちゆさ

佳調 花城朝忠

518 松間から見ゆるうらのむらさきの毛衣やなみの花よともて

点者

519 あさるさきむてよ業やおこたらぬうらの浪風やありてをても

大正二年二月二日付「沖毎」第一四七八号

垣花琉歌会 二月六日

晴天鶴 兼題 点者上江洲由具大人撰

高江洲昌壯

520 晴渡る空の朝日打むかて飛ひ立る鶴の声のたかさ

二 山田建周

霞ないぬ空の朝日打向て嬉しやけさとふす鶴やあらに

三 神山處如

522 澄渡る空に羽風音たかく飛るむら鶴のなたる美さ

四 花城朝忠

523 晴る青空に飛ひわたる鶴の千代の一声やむらち呉らな

五 勝連貞

524 空翔る鶴のうき雲やはらてすみて鳴渡る声のしほらしや

点者上江洲由具大人

525 そらや晴あかて飛わたる鶴のこころたにかかる雲やないさめ

大正二年二月二三日付「新報」第四五九〇号

垣花琉歌会 二月六日

晴天鶴 兼題 点者上江洲由具大人

高江洲昌壯

526 晴渡る空の朝日打むかて飛ひ立る鶴の声のたかさ

二 山田建周

527 霞ないぬ空の朝日打向て嬉しやけさとふす鶴やあらに

三 神山處如

528 澄渡る空に羽風音たかく飛るむら鶴のなたる美さ

四 花城朝忠

529 晴る青空に飛はたる鶴の千代の一声やむらち呉らな

五 勝連貞

530 空翔る鶴のうき雲やはらてすみて鳴渡る声のしほらしや

点者上江洲由具大人

531 そらや晴あかて飛はたる鶴のこころたにかかる雲やないさめ

大正二年二月二四日付「新報」第四五九一号

琉歌研究会 二月十五日

初春 兼題 比嘉賀徳 仲濱政模共撰

川平恵許

532 野辺も山入端もみとりさしそへてころわかかへる春になたさ

二 川平恵許

533 心からすかた若くなくて行きのとかなる美代の春のはしめ

三 仲里政功

534 明雲とつれて深山鶯の春つけてほける声のしほらしや

四 比嘉賀忠

535 聞も嬉しさや深山鶯の春つけてふける千代の初声

五 眞榮里元璋

536 初春になれば深山鶯の窓に音つれる声のしほらしや

五 餘平名智寶

537 初春になれば深山鶯の庭に音つれる声のしほらしや

六 古堅榮秀

538 深山鶯にしらさなや庭の梅も花ひらく春になとす

点者比嘉賀徳

539 野辺も山の端もかすみ立そめて日影うらうらと春になたさ

点者比嘉賀徳

540 野辺の百草もみとりさしそえてころわかかへるのはしめ

点者仲濱政摸

541 誠けふからや春になてさらめのへも山のはも霞かかて

点者仲濱政摸

542 山端にかかる三ヶ月のかけもおほるなてみゆる春になたさ

大正二年三月七日付「新報」第四六〇二号

琉歌研究会 三月一日

琴 兼題 比嘉賀徳 仲濱政模共撰

一 川平恵許

543 志情ゆこめてかきならず琴の音にひかれゆさ我身のころ

二 比嘉賀忠

544 義理も志情も絃音にこめてならずつま琴の音のしほらしや

三 山里景昇

545 聞も嬉しさや花のわらんちやかうち寄らて弾る琴のしらへ

四 比嘉賀忠

546 誰かやとかやゆらつきに糸しめてならず妻琴の音のしほらしや

五 川平恵許

547 君か代はうたて調へゆる琴の音やよろつよの祝ひふくて

六 喜瀬喜長

548 嘉例吉の御座に嘉例吉ゆうたてかきならず琴の音のしほらしや

七 山口全則

549 思ひいや増さ垣ひさみをとて夜半にかきならず琴のしらへ

点者比嘉賀徳

550 誰すしらへゆか思ひ有明の月に琴のねのわ肝ひきめす

大正二年三月一日付「沖毎」第一四九六号

日曜会 三月九日

祈恋 兼題 点者伊江朝眞大人

仁 渡久山朝是

551 神もあはれとおほしめせいのちさへかけていのるころ

義 久志安壽

552 朝夕身のちりも払て祈たすかあはぬいたつらに年とへたる

礼 比嘉賀徳

553 恋の氏神の見捨ててかいまいら祈る身か思ひ詮もたたぬ

智 具志頭朝香

554 与所に語らぬ衾れ身かおもい神の引合せと朝夕たのむ

信 糸満朝義

555 祈る引合のありなきに連て肝や浮舟のうてもつかぬ

秀 具志川朝及

556 祈る身かまことつくりらぬゆへかなまて引合のないらぬあすか

秀 渡慶次朝宣

557 朝夕さも神にいのるより外に与所にたのまりめわ身の思ひ

佳 名護朝直

558 神よりも外に誰よたのまれかあさゆ焦れゆる我身の思ひ

佳 兼濱朝珂

559 肝心くたち祈る願事や神のみすらりのあらなうちゆめ

点者伊江朝眞

560 思ひ身にあまてあたら黒髪も神にささけたる人の衾れ

大正二年三月一二日付「沖毎」第一四九七号

日曜会 三月九日

花売の縁を見て 当座 点者伊江朝眞大人

仁 當銘朝穎

561 いつもさたざれら親子うしつれてとめて振合る塩屋のむかし

義 比嘉春株

562 花よ売て暮す衾れ森川の行衛尋ねたす世々のかかみ

礼 森田猛徳

563 花売たる縁に振合ちやる□人か義理と真心や沙汰と残る

智 稻福全名

564 尋ゆる人や塩屋にまいらても煙り立つかたにとまいていまう

れ

565 昔森川や世中のかかみ切り切りになても節や守て

信 知念棚敦

566 いつも名のくちゆめ親子押列て行衛たつねたる塩屋の苔屋

秀 糸満朝庸

567 女身の一人あてなしもつれて馴れぬ塩屋田港とまいて行さ

秀 稻福全名

568 日々のいとなみに振別れてをたる妻行逢たすや梅の情け

佳 名護朝直

569 さかり衰に義理やうしなはむ花売になたる人のしほらしや

佳 阿波根朝祥

570 梅の花と枝に情かよはしやひ又も振合さ糸の御縁

点者伊江朝眞

大正二年三月一五日付「沖毎」第一五〇〇号

燕居会 大正二年二月 羽地村字真喜屋

若菜知時 兼題 点者諸見里朝奇撰

一 珀雲

571 はつ春になれば若葉さしそへて時よしるものやわかなさらめ

二 瀬石

572 いつも春くれば翠さしそへて時たかぬもゆる野辺の若菜

三 翠董

573 初春になれば若葉もえ□けて野辺のはつ若菜ときも違ぬ

四 艾史

574 浮世もの毎やかはるとも春の節たかぬものや野辺の若菜

五 品夫

575 はつ春になれば時よし□かほに日々にもえしける野辺の若菜

576 六 岩木
はつ春の野辺に出てななめれば時たかぬ□ゆる野辺の若菜

七 狂犬

577 七 狂犬
いつも春くれはみとりわかかひて露かみてもゆる野辺の若菜

大正二年三月一六日付「沖毎」第一五〇一号

燕居会 大正□年三月 羽地村字真喜屋

松風 兼題 点者諸見里朝奇撰

一 漱石

578 一 漱石
ねさみ驚きに琴の音よ□めは庭の松風の千代のひひき

二 狂犬

579 二 狂犬
うれしさや庭の松に吹風も君か万代のことのひひき

三 品夫

580 三 品夫
庭のまし内の松風の音や月にしらへよる琴のここと

四 林永

581 四 林永
かくれすむ宿の庭の松風や我きも慰める伽になゆさ

五 銀月

582 五 銀月
霰さめともて戸はあけて見れば松に吹きすぎる夜半のあらし

六 翠董

583 六 翠董
きくも淋しさや夕間暮の空になれぬ山里の松のあらし

七 翠董

584 七 翠董
聞もうれしさや山住の宿の庭の松風の音もすみて

七 艾奥

585 七 艾奥
きくもうれしさや浮世浪たたぬ庭の松風の音もすみて

七 艾奥

586 七 艾奥
世のちりもたたぬ庭の老まつに吹き送る風の音もしつか

大正二年三月一七日付「新報」第四六一二号

日曜会 三月九日

祈恋 兼題 点者伊江朝眞

仁 渡久山朝是

587 仁 渡久山朝是
神も衾とおほしめせいのみさへかけていのるころ

義 久志安壽

588 義 久志安壽
朝夕身のちりも払て祈たすかあわらぬいたつらに年と経たる

礼 比嘉賀徳

589 礼 比嘉賀徳
恋のうち神の見捨ててかいまいら祈る身か思ひ詮もたたぬ

智 具志頭朝香

590 智 具志頭朝香
与所に話しぬ衾れ身かおもひ神の引合と朝夕たのむ

信 糸満朝義

591 信 糸満朝義
祈るひきやわしのありなきに迷て肝や浮舟のうてもつかぬ

秀 具志川朝及

592 秀 具志川朝及
祈る身か真とつくりらぬよへかなまで引合のなひらぬあすか

秀 渡慶次朝宣

593 秀 渡慶次朝宣
朝夕さも神にいのるより外に与所にたのまりめわ身の思ひ

佳 名護朝直

594 佳 名護朝直
神よりも外に誰にたのまれかあさよ焦れゆる我身の思ひ

佳 兼濱朝柯

595 佳 兼濱朝柯
肝心るくたち祈る願事や神のみすちりのあらなうちゆめ

点者伊江朝眞

596 点者伊江朝眞
思身にあまてあたら黒髪も神にささけたる人の衾れ

大正二年三月一八日付「新報」第四六一三号

日曜会

三月九日

花売の縁を見て

当座

点者伊江朝貞

仁

當銘朝穎

いつもきたされら親子うしつれてとめて振合る塩屋のむかし

義

比嘉春株

花よ売て暮す衾り森川の行衛尋ねたす世々のかかみ

礼

森田孟徳

花売たる縁に振合ちやる二人か義理と真心や沙汰と残る

智

稲福全名

尋ゆる人や塩屋にまいらてもものけむり立つかたにとまいていま
うり

信

知念棚敦

昔森川や世の中の鏡切り切りになても筋や守て

秀

糸満朝庸

いつも名のくちゆめ親子押列て行衛たつねたる塩屋の苦屋

秀

稲福全名

女身の一人あてなしもつれて馴ぬ塩屋田港とまいて行き

佳

名護朝直

日々のいとなみに振別れてをたるとし子行達たすや梅の情け

佳

阿波根朝祥

さかり衰に義理やうしなわぬ花売になたる人のしほらしや

佳

点者伊江朝貞

梅のひと枝に情かよはしやひ又も振合さ糸の御縁

初聞鶯

比嘉賀徳 仲濱政模共撰

一

川平恵許

急く道すからたちよとて聞ゆさ深山うくひすの千代のはつ声

二

古堅榮秀

聞くも嬉しさを待兼てをたる深山鶯の千代の初声

三

川平恵許

聞くも嬉しさを庭の梅か枝にきなくうくひすの千代の初声

四

餘平名智寶

夜明しらしらと深山鶯の嬉しやけさほける千代の初声

四

喜瀬喜長

夜明しらしらと聞くも嬉しさを藪の鶯の千代のはつ声

四

山里景昇

夜明しらしらと深山鶯の嬉しやけさほける千代の初声

五

眞榮里元璋

肝いそく道も立よとて聞ゆさ深山鶯の千代の初声

六

眞榮里元璋

かにも嬉しさを朝夕待兼る深山鶯の初声聞ゆす

七

山口全則

聞くも嬉しさを深山鶯の庭の梅か枝にほける初声

七

点者比嘉賀徳

谷の鶯もけふからや里に出て春つける声の□らしや

七

点者比嘉賀徳

若菜つみなけな聞もうれしさを野への鶯の□らし初声

大正二年三月一九日付「新報」第四六一四号

大正二年三月二〇日付「新報」第四六一五号

琉歌研究会

燕居会

三月

羽地村

松風 兼題 諸見里朝奇撰

一 漱石

618 寝さみ驚きに琴の音よとめは庭の松風の千代のひびき

二 狂犬

619 うれしさや庭の松に吹風も君か万代のことのひびき

三 晶夫

620 庭のまし内の松風の音や月にしらひゆる琴のここち

四 林永

621 かくれすも宿の庭の松風や我きも慰める伽になゆさ

五 銀月

622 霰さめともて戸はあけて見れば松に吹きすける夜半のあらし

六 翠口

623 きくも淋しさや夕間くれの空になれぬ山里の松のあらし

七 翠口

624 聞もうれしさや山住の宿の庭の松風の音もすみて

七 艾叟

625 きくもうれしさや浮世浪たたぬ庭の松風の音もすみて

七 艾叟

626 世のちりもたたぬ庭の老まつに吹き送る風の音もしつか

大正二年三月二〇日付「沖毎」第一五〇五号

垣の花詠歌会

古寺花

上江洲由具大人撰

一 勝連貞

627 あれはてる寺のむかししのはれさ庭にさく花の色香みれば

二 勝連貞

628 つゆうけて咲る花のぬれ顔やあれはてる寺の名残ましゆさ

二 翁長良才

629 法の師もをらぬあはれ古寺の昔し忘ららぬ花や咲ちやら

三 花城朝忠

630 見ちもちやかなさや古寺の庭の葉かくれに咲ちやるみやまさく

三 上江洲由壽

631 法の跡かけも絶る古寺に誰かために咲ちやか庭のさくら

三 上江洲由壽

大正二年三月二一日付「新報」第四六一六号

燕居会 二月 羽地村

若菜知時 兼題 諸見里朝奇撰

一 珀雲

632 はつ春になれば若葉さしそへて時よしるものやわかかなさらめ

二 漱石

633 いつも春くれば翠さしそへて時たかぬもゆる野辺の若菜

三 翠董

634 初春になれば若菜もえしけて野辺のはつ若菜ときも違ぬ

四 艾叟

635 浮世もの毎やかはるとも春の節たかぬもゆる野辺の若菜

五 晶夫

636 はつ春になれば時よしりかほに日々にもえしける野辺の若菜

六 岩木

637 はつ春の野辺に出て詠みれば時たかぬもゆる野辺の若菜

七 狂犬

638 いつも春くれば翠わかかえて露かみてもゆる野辺の若菜

大正二年三月二日付「沖毎」第一五〇六号

垣の花詠歌会

難逢恋

上江洲由具大人撰

一 勝連貞

639 夜々に忍ひとも里や御行逢ならぬあはれみちしはの露にぬれて

二 吉里眞仁

640 夜々にしのひとも逢ぬいたつらに露に袖ぬらち戻る恨みしや

三 勝連貞

641 かよひ路の草葉ふみ枯すまでものかす思里や御行逢もならぬ

四 高江洲昌北

642 かよひ路の草葉ふみ枯すまでも自由にお行逢ならぬ縁のつらさ

五 花城朝忠

643 忍ふあとかくち夜々に通れとも自由に御行逢ならぬ恋のつらさ

五 翁長良才

644 雨の降て晴て口れとも里や逢ぬいたつらに戻る恨みしや

大正二年四月一日付「沖毎」第一五一六号

燕居会

三月廿七日

羽地村字真喜屋

待花

兼題

点者諸見里朝奇撰

一 林永

645 里か植ておきやる庭の桜木のいつか咲初て伽になゆら

二 翠董

646 待かねてをれは思ひねの夢も花の俵のしけく見ゆさ

三 品夫

647 いつの夜に花や咲かち眺めゆか朝夕待ちかねる庭のさくら

648

花の俵にきもやおかされて雲かかる山も桜ともて

四 狂犬

649

待かねる故か我きも憧れて山の端の雲も花よともて

五 狂犬

650

の事も思まぬ花よ待かねて桜木のもとに朝夕かよて

六 艾史

651

素立ゆる花やいつか咲初て朝夕詠とて伽にしゆら

七 岩木

652

老の身になれば思事やないらぬ野山さく花と朝夕待ゆる

七 桜山

大正二年四月三日付「新報」第四六二八号

琉歌研究会

思当蓬美人 当座

比嘉賀徳 仲濱政模共撰

一 山口全則

653

ものゆ思はしゆさあまたをるなかに増て匂ひたちゆる花のはら

二 川平恵許

654

いつかましたててあかぬ詠めゆらゑらて抜出ちやる花のいろ香

三 仲里政功

655

花の魁になたる思無蔵に朝夕さも我肝しかるくれしや

点者比嘉賀徳

656

うき世波立てひろひ揚けられし花のさくら貝忘れくれしや

点者仲濱政模

657

わ肝ひかりゆさ浮世名に立ゆる山榭木の花のすかた見れば

大正二年四月五日付「新報」第四六二九号

琉歌研究会

夕陽映島

兼題

比嘉賀徳 仲濱政模共撰

一

眞榮里元璋

658 西さかる日の島の松原にうらうらとうつるかけの清さ

二

川平恵許

659 渡て行ち見ほしや西さかる日の影にうちやかゆる沖の小島

三

山口全則

660 写真とて見ほしや西さかるてたの沖の島々にうつる姿

四

眞榮里元璋

661 見るもうつくしや島の松原に西さかる日のかげのうつつ

五

山口全則

662 はるはると見ゆる島の松原に西さかるてたのうつつる清さ

六

喜瀬喜長

663 黄昏のそらの雲間よりもれる日にうちやかゆる沖の小島

六

比嘉賀忠

664 夕間暮とつれてかたふきゆる日の島浦にうつる影のきよらさ

点者比嘉賀徳

665 茜さすてたにてらきやかて見ゆさ雲とおみなちやる沖の小島

大正二年四月一九日付「新報」第四六四三号

琉歌研究会

蛙 兼題

比嘉賀徳 仲濱政模共撰

一

餘平名智實

666 聞はきくほとも淋しさと増る馴れぬ与所島の野辺の蛙

二

川平恵許

667 ふりつつく雨に小田や水こへてかはつ鳴く方とあふしさらめ

三

眞榮里元璋

668 聞もさひしきや明方の空にしみしきと鳴ゆる井戸の蛙

三

喜瀬喜長

669 わ肝しみしきと聞もさひしきや明けくれに鳴ゆる小田の蛙

四

川平恵許

670 明方の空にたなひきゆる霞雨ともてなきゆら小田のかはつ

五

比嘉賀忠

671 聞もさひしきや野辺の草やとに蛙鳴く声のしけくたちゆす

五

山口全則

672 聞もさひしきやなれぬ旅宿に声たてて鳴ゆる夜半の蛙

五

仲里政功

673 聞もつれなさや恋し暁の夢ゆおとろかす池の蛙

五

喜瀬喜長

674 夕間暮の空に聞もさひしきや雨つけて鳴ゆる小田の蛙

点者比嘉賀徳

675 馴れ山里に聞もさひしきや夕間暮の空の小田の蛙

点者仲濱政模

676 蛙 かにもかしましやめ夕間暮になれば小田にあつまとてなきゆる

大正二年五月二日付「新報」第四六五六号

琉歌研究会

水上落花

兼題

比嘉賀徳 仲濱政模共撰

一

古堅榮秀

677 山川の水に散り浮ふ桜柵ゆたてて眺めほしやの

678 急き川おりてしからみゆ立てれ流れ行く花のをしさあもの
二 古堅榮秀

679 しからみゆたててあかぬ眺めらな川に散り浮ふ花のすかた
三 古堅榮秀

680 てかやう思童川端におりて流れゆる桜すくて遊は
四 上間正才

681 かんおしさあるい走川の水にちりて流れゆる花の色香
四 川平恵許

大正二年五月三日付「新報」第四六五七号

琉歌研究会

水上落花 兼題 比嘉賀徳 仲濱政摸共撰

682 流れゆる水にちり浮ふ桜すくて行く春の名残忘れ
五 川平恵許

683 てかやう思童谷川の水にちり浮ふ桜すくて遊は
五 比嘉賀忠

684 すみて流れゆる山川の水に散りうかふ花の色のみさ
六 山里景昇

685 詠めてもあかぬ澄て流れゆる河口ちりうかふ花のみさ
七 翁長武雄

686 池の玉水にちり浮ふ花の風によられゆる色のみさ
八 眞榮里元璋

687 山嵐のたいんす吹ちらす花ゆにや又川水のなかつをしさ
点者比嘉賀徳

大正二年五月六日付「沖毎」第一五五〇号

同風社 四月二十七日 十分間即咏

左は去月二十七日同風社当座席上に於て余興として酒宴最
中十分間にして即詠せしものなりと

海松 当座 賀徳 賀雅

688 海松やいつも花や咲かねとも桜よりまさる床の飾り
二 賀慶

689 床飾りされてたんしゆ豊まれるさんこ海松の千代のすかた
三 政摸

690 きや程うれしさか海底の松の千代かけて床にかさりされて
四 政摸

691 海松のことにやきたためて見ほしや気まかせになたる人のこころ
四 景福

692 床の海松の色にひかされて雪の白髪も黒くなゆら
五 陸輝

693 岩ほたちもてる海の黒松や床の上にかさてさひやないさめ
六 朝香

694 花いきにあかてかはる色ないらぬまこと海松の頼むときは
七 朝香

695 榮て行宿の床の上にかさて千年へて行き海の小松
八 賀雅

696 赤色もゆたしや黒色もゆたしや床の海松の千代のすかた
九 朝珍

697 床の海松のかはりねんことになし思無蔵か思て呉らな
十 賀雅

698 たかすとりおちやか海底の小松此の宿の御祝あるしなとす

699 点者賀徳
ためられてあとと枝振もうちやて海松も床のかさりなとさ

大正二年五月八日付「新報」第四六六二号
燕居会 羽地村真喜屋

寄糸恋 諸見里朝奇撰

700 一 珀雲
むしに糸引かちはてん布織やいかなし思里か御衣よすらね

二 漱石

701 三 林永
し情けや日々に紺屋の糸こころ深くなくていちゆさ二人か中や

四 岩木

702 五 漱石
いちやしかな里に縁の糸はえて佛のたは互に引かな

703 一 珀雲
里よ待かねて糸かける夜や夏のみしか夜も明し兼て

二 漱石

704 三 林永
里とわが中に糸の縁むすていつまでも互にぬかんことに

大正二年五月二一日付「沖毎」第一五五五号

燕居会 羽地村字真喜屋

寄糸恋 点者諸見里朝奇撰

705 一 珀雲
むしに糸引かちは□ん布織□ひかなし思里か御衣よすらね

二 瀨石

706 三 林永
志情や日々に紺屋の糸こころ深くなくていちゆさ二人か中や

四 林永

707 五 漱石
いちやしかな里に縁の糸はえて佛のたは互に引かな

708 四 岩木
里よ待かねて糸かける夜や夏のみしか夜も明かし兼て

709 五 漱石
里とわか中に糸の縁むすていつまでも互にぬかんことに

大正二年五月二二日付「新報」第四六六号

琉歌研究会

隣家 兼題 比嘉賀徳 仲濱政模共撰

一 古堅榮秀

710 二 川平恵許
互に一近所や一人頼み頼み実誠尽ち暮ちいかな

三 山口全則

711 四 山口全則
垣やひさめても肝や朝夕さもへたてないぬ互に語る嬉れしや

712 五 上間正才
互に中垣やひさめ口いをもも肝や親兄弟の心さらめ

六 上間正才

713 七 饒平名智寶
離れやいをゆるひきはらふしやかも増て頼母しやとなりさらめ

714 八 眞榮里元璋
嬉しやなくれしやる一人かたれかたれいつも頼みゆすや隣さらめ

九 眞榮里元璋

715 一 饒平名智寶
浮世はなれとる山の詫住に頼むしや朝夕隣さらめ

二 眞榮里元璋

716 三 眞榮里元璋
垣やひさめてもへたてないぬことに互にかたやひらけふも明日も

四 眞榮里元璋

717 五 点者仲濱政模
隣交りやへたてないぬことに互に睦しくするか嬉しや

点者仲濱政模

718 隣てるものやおよそ□々に一人たらいたらしいゆすとかなめ

大正二年五月一四日付「沖毎」第一五五八号

日曜会 五月四日

船中梅雨 兼題 点者伊江朝眞大人

仁 山川朝棟

719 船やよしまらぬ五月雨や降ひいちやしななめよか瀬戸の景色

義 糸満朝庸

うらに梶まくらわ肝五月雨の日数ふるさとの名残りまさて

礼 松嶋朝京

721 肝やあしかちも五月雨の雨にきちられて船路日数くたさ

智 仲濱政模

かねもさみしさめ梅雨の空やつれる友舟の影もみらぬ

信 勝連貞

723 押風や真ともやかて嶋たちゆら五月雨も晴てななめほしやの

秀 花城朝忠

724 五月雨の降はひやにましくまてかねも淋しさめ七島渡中

秀 當銘朝穎

降る五月雨もいつか晴あかて七島灘やすくわてて行ら

秀 糸満朝庸

726 霧のたちわたて五月雨の空や昼も夜はらしの浪路こころ

佳 名護朝直

727 五月雨もふゆひいそきこき渡す浪あらくたちゆるさんは美崎

佳 安森盛秀

728 まことつて渡る嘉利吉の船や梅雨の空も糸の上から

佳 山城宗蔭

729 さみたれの雨の晴間またれゆめいかりとり船頭風やまとも

点者伊江朝眞

730 さみたれのそらや肝もかきこもて晴る間もないさめ伊平屋の渡

中

大正二年五月一六日付「新報」第四六七〇号

日曜会 十一日

忍涙恋 当座

仁 具志川□香

731 岩間かくれの水こころおもひ身か袖につつむなみた

義 花城朝忠

かにも苦しやめも忍ひ忍てせきとめるわ身の涙た

礼 渡嘉敷通昆

うてる涙や忍ふとも物思かをよ所□しゆらとめば

智 名護朝直

734 思ひ湧出る涙川そてしせきとめるものくれしや

信 知念積昌

735 涙なかなすなたまこかねあまた思事もむねにつつて

秀 大山朝眞

736 あかぬわかりの身か涙与所にあらわしゆめ胸につつて

秀 神山處如

737 よ所にみしゆめわかなみたたとへ胸中や□となても

佳 金武正宣

738 忍ふ思ひのなみたかしからみよたてとめやならぬ

佳 仲江朝薫

739 袖のしからみくち果て涙飲て朝夕暮しかねて

大正二年五月一六日付「沖毎」第一五六〇号

日曜会

五月十一日

忍涙恋

当座

点者伊江朝眞大人撰

仁

具志頭朝香

740

岩間かくれの水こころたもひ身か袖につつむなみた

義

花城朝忠

741

かねも苦しやめむ忍ひ忍てせきとめるわ身の涙

礼

渡嘉敷通昆

742

うてる涙や忍ふとも物思かを与所のしゆらとめは

智

名護朝直

743

思ひ湧出る涙川そてしせきとめるものくれしや

信

知念績昌

744

涙なかなたたまこかねあまた思事もむねにつつて

秀

大山朝眞

745

あかぬはかりの身か涙与所にあらはしゆめ胸につつて

秀

神山處如

746

与所にみしゆめわかなみたとへ胸中や瀧となても

佳

金武正宣

747

忍ふ思ひのなみた河しがらみよたてとめやならね

佳

伊江朝眞

748

袖のしからみくち果て涙飲て朝夕暮しかねて

大正二年五月一九日付「新報」第四六七三号

日曜会

五月四日

船中梅雨

兼題

点者伊江朝眞

749

船やよしまらぬ五月雨や降ゆひいちやしななめよか瀬戸の景色

義

糸満朝庸

750

うちに梶まくらわ肝五月雨の日数ふるさとの名残りまさて

礼

松島朝京

751

肝やあしかちも五月雨の雨にきちられて松路日数くたさ

智

仲濱政模

752

かねもさひしさを梅雨の空やつれる友舟の影もみらぬ

信

勝連貞

753

押風や真ともやかて島たちゆら五月雨も晴てななめほしやの

秀

花城朝忠

754

五月雨の降はひや□ましくまてかねも淋しさめ七島渡中

秀

當銘朝顯

755

降る五月雨もいつか晴あかて七島灘やすくわたて行ら

秀

糸満朝庸

756

霧のたちわたて五月雨の空や昼も夜はらしの浪路こころ

佳

名護朝直

757

五月雨のふゆひいそきこき渡す浪あらくたちゆるさんは美崎

佳

山城宗蔭

758

五月雨の雨の晴間またれゆめいかりとり船頭風やまとも

佳

安森盛□

759

まことつて渡る嘉利吉の松や梅雨の空も糸の上から

点者伊江朝眞

760

さみたれの空や□もんかきくもて渡る間もないさめ伊平屋の渡

中

大正二年五月二〇日付「新報」第四六七四号

琉歌研究会

郵便 兼題

比嘉賀徳 仲濱政模共撰

一 上間正才

761 飛ぶ雁の便り借るよりも増て文の通わしも自由になたさ

二 上間正才

762 四方の国々にたより橋かけて文の取り遣りも広くなたさ

三 饒平名智實

763 進行く□代や渡□やへさめても文□通わしの自由になたさ

四 山口全則

764 渡海やひさめても音信の文や自由に通わしゆる御代の嬉しや

五 眞榮里元璋

765 進て行く御代やかにも嬉しさめ文の通わしの自由になたさ

五 古堅榮秀

766 渡海やひさめても音信や互に自由にかよわしゆる御代のうれし

や 六 比嘉賀忠

767 すすみゆく御代や離島々も文の通わしの自由になたさ

七 川平恵許

768 やまとから沖繩便り橋かけて文のとりかへも自由になたさ

八 眞榮里元璋

769 御代のしるしさめいくりにへさめても文のかよわしの自由になた

さ 九 山里景昇

770 ひらけゆく御代や都から田舎文の通わしの自ゆになたさ

十 川平恵基

771 いくりにひさめても文の通わしに互に音信や聞くかうれしや

点者比嘉賀徳

772 渡海やひさめても隣宿ころおとつれや文にいちやいきやい

大正二年五月二三日付「沖毎」第一五六六号

同風社歌会 五月十八日

千代菊 十分間即詠 賀慶

一 政模

773 いつも此宿のさかていくしるし庭の千代菊の笑てさちゆす

二 賀徳

774 打寄合寄合かたる言の葉の花や千代菊のあかぬ色香

三 睦輝

775 秋の菊よりも色美しく咲さ庭の千代菊の花の姿

四 景福

776 春秋もしらぬ千代菊の花のさかて我庭にさちゆる嬉しや

五 朝顔

777 たかすもてなちやかいつも世に残て名にたちゆる千代の菊のむ

かし 六 賀雅

778 わか庭のかしら千代菊とやゆるあさ起て早く水よかけら

六 賀雅

大正二年五月三〇日付「新報」第四六八四号

琉歌研究会

寄衣恋 兼題 比嘉賀徳 仲濱政模共撰

一 古堅榮秀

779 あないる粗芭蕉の衣さへ無蔵か雪のはた吸ゆる浮世やすか

- 780 無蔵か肝こめて織て呉たる紺地朝夕さも真肌はなしくれしや
二 山口全則
三 眞榮里元璋
- 781 里か肌吸ゆる御衣になてたいんす朝夕さも御側吸はなやすか
三 山里景昇
- 782 きてむすれてもはなしかたなさやあれか志情けの□の衣
四 川平恵許
- 783 志情けゆこめて織て呉てある衣や片時もわはたはなしくれしや
四 川平恵基
- 784 烏わか羽の色よりも深く染めて思里か御衣ゆすらに
五 饒平名智寶
- 785 羽衣のあとて飛び渡て見ほしや旅にいまる里か加那志御側
五 翁長武雄
- 786 きれはてるまでも我肌はなさらぬ無蔵か織て呉てあるせめの衣
五 上間正才
- 787 与所の手にふれて匂分かち呉るな朝夕わか吸ゆる御衣のみ袖
六 比嘉賀忠
- 788 御衣やちうん里前形見呉て給れ我身や朝夕さも御側ともら
- 大正二年六月一日付「新報」第四六八六号
燕居会 五月卅日
- 789 水鶏 兼題 諸見里朝奇撰
一 岩木
- 790 窓たたく音に覚す目はさめて戸はあけて見れば水鶏さらめ
二 櫻山
夜半に音高く窓□戸はたたねさめおとるかす沢の水鶏

- 791 ふける夜の空にねやの戸はたたねさめ驚かす池の水鶏
二 艾叟
三 艾叟
- 792 ねさめ驚きに誰るかてやりとめは夜半に戸はたたく池の水鶏
三 晶夫
- 793 有明のそらにねやの戸はたたく誰るかてやりとめは池の水鶏
三 漱石
- 794 有明の空にま□の戸はたたねさめ誰かすてやりとめは小田の水鶏
- 大正二年六月一日付「沖毎」第一五七五号
燕居会 五月三十日 羽地村字眞喜屋
- 795 窓たたく音に覚す目はさめて戸はあけて見れば水鶏さらめ
二 櫻山
- 796 夜半に音高く窓の戸はたたねさめおとるかす沢の水鶏
二 艾叟
- 797 ふける夜の空にねやの戸はたたねさめ驚かす池の水鶏
三 艾叟
- 798 ねさめ驚きに誰るかてやりとみは夜半に戸はたたく池の水鶏
三 晶夫
- 799 有明のそらにねやの戸はたたく誰るかてやりとみは池の水鶏
三 漱石
- 800 有明の空にまきの戸はたたねさめ誰かすてやりとみは小田の水鶏
- 大正二年六月二日付「新報」第四六九七号

琉歌研究会

新竹 兼題

比嘉賀徳 仲濱政摸共撰

一 川平恵許

801 見るも涼しさや庭の若竹の押風になひく千代のすかた

二 山里景昇

802 見る程も美さ庭の新竹の押風になびく千代のすかた

三 眞榮里元璋

803 庭の若竹の池の玉水にすたすたとうつる影の美さ

四 古堅榮秀

804 見るも涼しさや押風になひく庭の呉竹□千代のすかた

四 饒平名智寶

805 見るも涼しさや露の玉むす庭の若竹の千代のすかた

五 上間正才

806 親よりも増て高くなて行さとしぬき出たる庭の真竹

六 川平恵基

807 詠めてもあかぬ庭の若竹の青葉すたすともたいゑ清さ

点者比嘉賀徳

808 庭の若竹のよよに千代こめて親よりも高くもたいゑ美さ

点者仲濱政摸

809 見ればうれしさや庭の若竹の日々にいろまさる千代のすかた

大正二年六月一四日付「沖毎」第一五八八号

日曜会 六月八日

魚 兼題

点者伊江朝眞大人撰

甲 當銘朝顯

810 釣の糸たらちまかかぬる魚のうけ引るうれしやいちぬいやらぬ

乙

比嘉賀徳

811 四方の浦々につてもつくれらぬ魚やわが国の富のもとひ

丙 與那原良儀

812 ふちにすむ魚もゑものむさふてと釣の糸繩にかかて行さ

丁 兼島景福

813 素立ゆる主の水たたくおとに列てあつまゆさ池の俳鯉

戊 伊江朝薫

814 池のはちすはやかさになち魚の夏も与所なちゆて躍る清さ

秀 吉里眞仁

815 天河の池に年よへる鯉のやかてそらのふて龍となゆら

秀 山川朝棟

816 魚の身やてかち四方の浦々も自由に行めくて遊てくらち

秀 糸満朝庸

817 世話渡も立ぬ池の魚こころ朝夕友つれてあそてみほしや

佳 佐久本孟教

818 たひやたひつれてしゆくやしゆくはかり朝夕もつましく遊ふし

佳 渡慶次朝宜

819 池にすむ魚も人のしなさけに列て手のうらに躍るしほらしや

佳 松島朝京

820 高口に登て池よなかめれば押列て躍る魚の美さ

点者伊江朝眞

821 源河走川の青柳のかけにわかゆつて今日や遊てむたな

点者伊江朝眞

822 あまの釣繩や押風にとはちさくら鯛つゆさ阿護の浦わ

大正二年六月一五日付「沖毎」第一五八九号

日曜会

六月八日

衣錦帰郷

当座

点者伊江朝眞大人撰

仁

渡慶次朝宣

にしき衣ちかへるひひのいさをしやいつも世の中にひかり立よ
ら

義

金武正宣

いつも沙汰さりら国の為つくち錦きち帰る君かいさを

礼

渡慶次朝宣

年月と共につたるいさおしや錦きちかへる袖に見ゆさ

智

知念續昌

錦きち戻る日々はいさをしやいつも古里に光りたちゆさ

信

伊江朝薫

立るいさをしや沖繩にのくち錦打重ねもとていまいさ

秀

森田孟徳

いつも沙汰されらいさをしよ立て錦きて踊る君かほまれ

秀

高安朝常

にしき衣る美袖ひきもとみらら口ふやかれる今日や名残はかり

秀

名護朝直

いさをしや日々につみかさねかさね錦きちもとる人のしほらし
や

佳

具志頭朝香

きや程嬉しさがいさをしよ立て錦きちかえる君かこころ

佳

比嘉春株

錦きち国に帰る君送るうまん人の袖や露とうちゆる

佳

名護朝直

なれし故里に錦きちもとる君かいさをしやかかみなゆさ

佳

翁長良才

沖繩のためにいさをしよ立て錦うち重ねふくていまふれ

佳

吉里眞仁

錦うち重ね古里にかへる君か名やいつも沙汰と残る

佳

大山朝眞

ひひの働や沖繩に残ち錦きち帰る君かほまり

点者伊江朝眞

錦うちかさねかへるよろこひものせていく舟や糸の上から

大正二年六月一八日付「新報」第四七〇三号

日曜会

六月八日

魚

兼題

点者伊江朝眞

甲

當銘朝穎

鈴の糸たらちまちなねる魚のうけ引るうれしやいちもいやらぬ

乙

比嘉賀徳

四方の浦々につてもつくれらぬ魚やわか国の富のもとひ

丙

與那原良儀

淵にすむ魚もゑものむさふてと釣の糸繩にかかて行さ

丁

兼島景福

素立ゆる主の水たたくおとに馴てあつまゆさ池の緋鯉

戊

伊江朝薫

池のはちすはやかさになち魚の夏も与所なちゆて躍る清さ

秀

吉里眞仁

天河の池に年よへる鯉のやかてそらのふて龍となよら

秀

山川朝棟

844 魚の身やてかち四方の浦々も自由に行めくて遊てくらち

秀 糸満朝庸

845 世話波も立たぬ池の魚こころ朝夕友つれてあそてみほしや

佳 佐久本孟教

846 たひやたひつれてしゆくやしゆくはかり朝夕もつましく遊ふし
はらしや

佳 渡慶次朝宣

847 池にすむ魚も人のしなさけに馴て手のうらにをとるしほらしや

佳 松島朝京

848 高殿に登て池よなかめれは押列て躍る魚の美さ

佳 点者伊江朝眞

849 源河走川の青柳のかけにわか□つて今日や遊てむたな

佳 点者伊江朝眞

850 あまのつり縄や押風にとはちさくら鯛つゆさ阿□の浦わ

大正二年六月一九日付「新報」第四七〇四号

日曜会 六月八日

衣錦帰郷 当座 点者伊江朝眞

仁 渡慶次朝宣

851 にしき衣ちかへるひひのいさをしいつも世の中にひかり立ち

義 金武正宣

852 いつも沙汰さりら国の為つくち錦きち帰る君かいさを

礼 渡慶次朝宣

853 年月と共につたるいさおしや錦きちかへる袖に見ゆさ

智 知念續昌

854 錦きち戻る日々のいさをしやいつも古郷に光りたちゆさ

855 信 伊江朝薫

立るいさをしや沖繩にのくち錦打重ねもとていまいさ

秀 森田孟徳

856 いつも沙汰されらいさをしよ立て錦きて帰る君かほまれ

秀 高安朝常

857 にしき衣る美袖ひきもとめららぬふやかれる今日や名残はかり

秀 名護朝直

858 いさをしや日ひにつみかさねかさね錦きち□とる人のしほらし

佳 具志頭□香

859 きや程嬉しさかいさをしよ立て錦きちかへる君かこころ

佳 比嘉春株

860 錦きち国に帰る君送るうまん人の袖や露とうちゆる

佳 名護朝直

861 なれし故郷に錦きちもとる君かいさをしやかかみなゆさ

佳 翁長良才

862 沖繩のためにいさをしよ立て錦うち重ねふくていまふれ

佳 吉里眞仁

863 錦うち重ね古郷にかへる君か名やいつも沙汰と残る

佳 大山朝眞

864 ひひの働や沖繩に残ち錦きち帰る君かほまり

点者伊江朝眞

865 錦うちかさねかへるよろこひものせていく舟や糸の上から

大正二年六月二〇日付「新報」第四七〇五号

琉歌研究会

877	876	875	874	873	872	871	870	869	868	867	866
											虹 兼題
											比嘉賀徳 仲濱政模共撰
											川平恵許
											一
											雨や晴れあかて朝日さす山に虹の浮橋のかかる美さ
											二
											井川からつつきみそら迄高く虹の浮橋のかかる美さ
											三
											川平恵許
											四
											雨やうちはれてそらに立つ虹のてたにみかかれる色の美さ
											五
											上間正才
											四
											雨ふゆんとめはてたや照りあかて山入端にかかる虹の美さ
											五
											比嘉賀忠
											四
											村雨も晴れてみねの松原にかけわたす虹の橋の美さ
											五
											眞榮里元璋
											五
											虹の浮橋のそらにあらはれてにや又むら雨も晴れていちゆき
											六
											山里景昇
											六
											かき曇て降たる村雨も晴れてそらに虹橋のかかる美さ
											七
											比嘉賀忠
											六
											写真とて見ほしやみねの松原に橋のことかかると虹のすかた
											七
											上間正才
											七
											虹やてた加那志赤糸帯かやゆら雲の御衣の上にかけてあすや
											七
											饒平名智寶
											七
											見るも涼しさや夏雨も晴れてそらに橋かかる虹の美さ
											七
											山口全則
											七
											出て見て童雨も晴れあかてそらに色とたるにしのにしき
											七
											仲里政功
											八
											雨やうちはれてすみわたる空にし□浮橋のかかる美さ
											八
											山里景昇

888	887	886	885	884	883	882	881	880	879	878
										夏雨も□れて古波蔵松原ににしのかけ橋のなたる美さ
										大正二年六月二九日付「新報」第四七一四号
										琉歌研究会
										蓮 兼題
										比嘉賀徳 仲濱政模共撰
										川平恵許
										一
										泥の中出て泥も染つかぬ色香世に勝る池のはちす
										二
										眺めてもあかぬ池の玉水に打笑てさちやる蓮の清さ
										三
										水底に移る影迄もかはしやあん美しくさちやる池の蓮
										四
										世間沙汰される牡丹より我身や増て詠めゆさ池のはちす
										四
										池にさち出たる蓮の花見れば暑忘れゆさ眞六月も
										五
										起て見て童うつくしや池にましらさき出たる蓮の姿
										五
										詠めてもあかぬ高殿の床に活である蓮の花の色香
										五
										みすとみて起て匂さとて見れば露かみて蓮のさちやの美さ
										五
										見るもすすしさや吹わたる風に露の玉ゆるる蓮の若葉
										五
										泥中ゆ出てちりひちもつかぬ蓮やまめ人の心さらめ
										五
										点者仲濱政模
										点者比嘉賀徳
										上間正才
										山里景昇
										眞榮里元璋
										仲里政功
										上間正才
										川平恵許
										饒平名智寶

大正二年七月一日付「新報」第四七二六号

燕居会 六月廿八日

寄竹祝 兼題 諸見里朝奇撰

一 嗽石

889 長閑なる美代やそのの呉竹に吹送る風も千代のひびき

二 岩木

890 君か万代のすかたさめ宿のとしことにさかる竹のはやし

三 艾叟

891 御祝日になれば庭の群竹に吹風のおとも千代のひびき

四 翠董

892 御祝事つづく宿の呉竹や千代のいろそへて盛るうれしや

四 狂犬

893 かれよしの宿の庭の群竹や千代のいろそへて盛るうれしや

五 嗽石

894 日々にもえしける庭の若竹や栄ていく美代の姿さらめ

五 林永

895 長閑なる美代の御恵の露に庭の若竹の栄るうれしや

大正二年七月一日付「沖毎」第一六〇五号

燕居会 六月廿八日

寄竹祝 兼題 点者諸見里朝奇撰

一 漱石

896 長閑なる美代やそのの呉竹に吹送る風も千代のひびき

二 岩木

897 君か万代の姿さめ宿の年ことにさかる竹のはやし

三 艾叟

898 御祝日になれば庭の群竹に吹風の音も千代のひびき

四 翠董

899 御祝事つづく宿の呉竹や千代のいろそへて盛る嬉しや

四 狂犬

900 かれよしの宿の庭の群竹や千代のいろそへて盛る嬉しや

五 漱石

901 日々にもえしける庭の若竹や栄ていく美代の姿さらめ

五 林永

902 長閑なる美代の御恵の露に庭の若竹のさかるうれしや

大正二年七月一四日付「新報」第四七二九号

琉歌研究会

見恋 兼題 比嘉賀徳 仲濱政摸共撰

一 古堅栄秀

903 只一夜たいんす句移ち見ほしやゆき過る無蔵が花の色香

二 川平恵許

904 をかまねば此身のよて焦れゆか思て自由ならぬ里かすかた

三 上間正才

905 云言葉の色にいちや出さらぬをかみつめなけな思ひくたち

四 川平恵許

906 をかて自由ならぬ人と知りなけないたつらに我肝まよていちゆ

さ

五 饒平名智寶

907 見れば見る毎におも事やつまて忘ららぬものや無蔵かしかた

六 上間正才

908 をかまれやしちも自由ならぬ中と思は恋しさや増ていちゆさ

七 比嘉賀忠

909 いそく道中に見るも恋しさやゆき過る無蔵か花のすかた

八 喜瀬喜長

910 見るも恋しさや蝉の羽衣に口の肌漏らす無蔵かすかた

八 川平恵基

911 一寸も片時も忘るまやないさめ一目見ちやる無蔵か花の姿

大正二年七月一六日付「新報」第四七三一号

日曜会 七月十三日

枕 当座 点者伊江朝眞

仁 高安朝常

912 無蔵とふやわちゆて語るむつことや与所にあわらすなつけの枕

義 大宜見朝隆

913 つけの小枕に尋ねふしやあすや夜半に見はてらぬ夢の行へ

礼 兼島景福

914 なさけある返事の文見ちやる夜や夢も嬉しことつけの枕

智 仲江朝薫

915 枕ちりはらてまつの戸もささぬ衾れ開鐘かきの音も聞ちやる

信 知念政置

916 思ひ身につつて一人ねの空のつらさしるものやね屋の枕

秀 高安朝常

917 夜半に草まくら露しけくおちやすなれしふるさとの夢の名残

秀 糸満朝義

918 ねやの小枕に尋やひ聞かなしる人やをらぬ夢の行衛

佳 山田有度

919 一期むつましくあやかやい見ほしや今夜のねさしきの入子枕

佳 眞喜志康治

920 老の身になれば夏の真昼間やはなちはなさらぬ昔のまくら

点者伊江朝眞

921 御側より口ておやのうてまくらかたらたるむかし夢にみゆさ

大正二年七月一六日付「沖毎」第一六二〇号

日曜会 七月十三日

坂月 兼題 点者 伊江朝眞大人撰

仁 松嶋朝京

922 蚊坂のほて那覇港見れば波によられゆる月のきよらさ

義 渡慶次朝宣

923 ゆつくりひらのほて詠むれば月の波間ぬきやかゆるかけの美さ

礼 山城宗蔭

924 豊む口中ひらのほて行く間やさやかなて給れ今夜の御月

智 與那原良儀

925 さやか照る月に蚊ひら登てあかぬ詠ゆさ那覇の景色

信 伊江朝薫

926 やみのさくひらや歩て歩まらぬ木の間ぬきやかゆる月と待ちゆる

秀 大宜見朝隆

927 識名坂登てあかぬなかみたさ口のくら岳にかかる御月

秀 具志頭朝香

928 うれしさや今宵つきにさすわれて与那の高坂もこえて行さ

佳 美里朝珍

929 ゆつくり坂登てゆくて居るうちに波間ぬきあかたる月の清さ

佳 伊江朝薫

大正二年七月一八日付「沖毎」第一六二二号

日曜会

七月十三日

枕 当座

点者 伊江朝真大人撰

仁

高安朝常

952 無蔵とふやわちゆて語るむつことや与所にあらわすなつけの枕

義

大宜見朝隆

953 つけの小枕に尋ねふしやあすや夜半に見はてらぬ夢の行へ

礼

兼島景福

954 なさけある返事の文見ちやる夜や夢も嬉しことつけの枕

智

伊江朝薫

955 枕ちりはらてまつの戸もささぬ寝れ開鐘かきの音と聞ちやる

信

知念政置

956 思ひ身につつて一人ねの空のつらさしるものやねやの枕

秀

高安朝常

957 夜半に草まくら露しけくおちやすなれしふるさとの夢の名残

秀

糸満朝義

958 ねやの小枕に尋やひ聞かなしる人やをらぬ夢の行衛

佳

山田有度

959 一期むつましくあやかやい見ふしや今夜のねさしきの入子枕

佳

眞喜志康治

960 老の身になれは夏の真昼間やはなちはなさらぬ菅のまくら

点者 伊江朝真

961 御側より詰ておやのうて枕かたらたるむかし夢にみゆさ

大正二年七月二八日付「新報」第四七四三号

琉歌研究会

兼題 旅行

比嘉賀徳 仲濱政摸共撰

川平恵許

962 今日や行ち明日やかかへる旅やても別れゆる涯やなこりはかり

二

上間正才

963 山とめば野原川とめは浜路走り行く中にけふもくれて

三

山口全則

964 馴れぬ島めぐてかはて恋しさやなれし故郷の親の御側

四

比嘉賀忠

965 胸中の苦れしや語るへもならぬかにつれなさめ旅の空や

五

上間正才

966 自由に行通のなる御代になても路つれと頼む旅の習や

六

山里景昇

967 文の道学ふ別れ路ゆたいんす馴れし故郷やはなれくれしや

六

喜瀬喜長

968 国々ゆめくて見るものやあらた広くなて行ゆさわ身のこころ

七

眞榮里元璋

969 大和初旅や心浮ちやかゆさあまくまの景色見ちもあかぬ

点者比嘉賀徳

970 海山の景色打かはりかはりながめゆく旅や百氣のひゆさ

大正二年八月一日付「新報」第四七四六号

琉歌研究会

七月卅日

兼題 烏

比嘉賀徳 仲濱政摸共撰

川平恵許

971 揃ていまいる御客よしみ顔見して床の上のからす鳴かぬはかり

- 983 鳴も又すらね飛ひも又すらね枯木たち居ゆるよ半の鳥
点者仲濱政模
- 982 親の恩むくる小鳥に向て厄鳥と与所にいやする惜さ
点者比嘉賀徳
- 981 誰かすかきなちやか尋ねやい見ほしや詠めてもあかぬ床のから
す
点者比嘉賀徳
- 980 のかす小鳥や声たてて鳴ちゆか思事のあらは語て聞かす
八 山里景昇
- 979 夜半に空高く鳴渡るからす思事のあらは語て聞かす
七 川平恵基
- 978 のかす小鳥や物思顔しちゆて誰ゆ待詫ひてとりてぬちゆか
七 山口全則
- 977 物思顔見せて床の上にぬちもなかなしゆて鳥誰かすしゆか
六 川平恵許
- 976 とかく物思の深さあめからす飛ひもとはれらぬとりてぬちゆす
五 山口全則
- 975 のよて世話世話口床便よてぬちゆか思事のあらは聞かせからす
五 比嘉賀忠
- 974 人になて親の恩しらぬものやからすより下の畜生さらめ
四 古堅榮秀
- 973 のかす小鳥やとりとりとしちゆか朝夕床の間の枯木たよて
三 喜瀬喜長
- 972 のかす山鳥木の枝ゆたよて一人さひさひと誰るゆ待ゆか
二 眞榮里元璋

- 992 思みつくすことの一さへなざぬあたによりつめる年のらみし
二 狂犬
- 991 年のよていけはかねもつれなさみよらてかたらゆる人もをらぬ
一 兼題 晶夫
諸見里朝奇撰
- 990 あ□□管につなかれて我身の思ひ自由ならぬ暮す恨しや
五 □月
- 989 いつからか我身にもゆる世話草もかり捨て自由に暮ちいちゆら
四 林永
- 988 世話なみもたたぬ朝夕らくらくと渡ていかれよる浮世やらな
三 狂犬
- 987 思みつくすことの一さへなざぬあたによりつめる年のらみし
二 狂犬
- 986 年のよていけはかねもつれなさみよらてかたらゆる人もをらぬ
一 兼題 晶夫
諸見里朝奇撰
- 985 揃ていまいる人に歌かけゆされてきや程うれしか床のからす
点者仲濱政模
- 984 今日やうれしさら床の枯ほこに独りさひさひと居ゆるからす
大正二年八月七日付「沖毎」第一六四一号
燕居会 大正二年八月

993 や
三 狂犬
世話なみもたたぬ朝夕らくらくと渡ていかれよる浮世やらな
四 林永

994 いつからか我身にもゆる世話草もかり捨て自由に暮ちいちゆら
五 出月

995 衾れ宮につなかれて我身の思ひ自由ならぬくらすらみしや

大正二年八月一〇日付「新報」第四七五五号
琉歌研究会

初秋暁 兼題 比嘉賀徳 仲濱政摸共撰
眞榮里三元璋

996 暁のそらの菝に音立て新西吹初める秋になたさ
一 川平恵許

997 暁の鐘の音も身にしみて思ひいやましゆる秋になため
二 古堅榮秀

998 起て嬉しさやあかつきの空の涼し風送る秋のはしめ
三 饒平名智寶

999 暁のそらの草の葉の露や玉と思みなちやさ秋の初め
三 川平恵基

1000 暁のそらの松葉吹く風の音にしられゆさ秋になとす
四 山口全則

1001 夏も暮れはてて初秋になれば暁のそらの風の涼たしや
四 比嘉賀忠

1002 立そめる秋の暁の風に手になれし扇子も与所になすさ
五 山口全則

1003 東り立雲も姿打かはて押風もすたしや秋のはしめ
六 上間正才

1004 いな秋になため暁の野辺に露の白玉のしけくたちゆす

大正二年八月一三日付「新報」第四七五八号
日曜会

蜘蛛 兼題 点者伊江朝眞 兼濱朝珂
甲

1005 門の戸もささぬ治とる御代や獄もくふかすのかかるしけさ
乙 上間長暢

1006 月もてり美さ蜘蛛の糸かすにかかるしら露や玉のすたれ
丙 新垣太郎

1007 庭の蜘蛛経の豎に掛ゆすか待兼る雨の今日やふゆら
丁 山城宗得

1008 青柳のえたにかけてあるくものいとに朝つゆのかかる美さ
戌 川平恵許

1009 花によりつきゆる蝶見つみてと蜘蛛や総かけて忍てをゆら
秀 與那原良儀

1010 雨かまたやゆら庭のくもかすの糸や引かはち立になしゆす
秀 美里朝珍

1011 雨も晴れあかて庭の蜘蛛かすにかかるしら露の玉の清らさ
佳 川平恵許

1012 人のさへ知らぬ雨風もはかて総ゆかけかはす蜘蛛のたくみ
佳 糸満朝義

1013 庭の袖かきに蜘蛛の糸かけて露のしら玉のかかる美さ
点者伊江朝眞

1014 浮世かた隅やたつぬ人もをらぬくもの糸かける柴のとひら

大正二年八月一三日付「沖毎」第一六四七号

日曜会 八月十日

蜘蛛 兼題 点者 伊江朝真大人

甲 兼濱朝珂

1015 門の戸もささぬ治とる御代や□もくふかすのかかるしけさ

乙 上間長□

1016 月もてり美さ蜘蛛の糸かすにかかるしら露や玉のすたれ

丙 新垣太郎

1017 庭の蜘蛛かすの□に掛ゆすか待兼る雨の今日やふゆら

丁 山城宗得

1018 青柳のゑたにかけてあるくものいとに朝つゆのかかる美さ

戊 川平恵許

1019 花によりつきゆる蝶見つみてと蜘蛛や認かけて忍てをゆら

秀 與那原良儀

1020 雨がまたやゆら庭のくもかすの糸や引かはちたてになしゆす

秀 美里朝珍

1021 雨も晴れあかて庭の蜘蛛かすにかかるしら露の玉の清らさ

佳 川平恵許

1022 人のさへ知らぬ雨風もはかて認ゆかけかは□蜘蛛のたくみ

佳 糸満朝義

1023 庭の袖かきに蜘蛛の糸かけて露のしら玉のかかる美さ

点者 伊江朝真

1024 浮世かた隅やたつぬ人もをらぬくもの糸かける柴のとひら

大正二年八月一四日付「沖毎」第一六四八号

日曜会 八月十日

新秋 当座 点者 伊江朝真

仁 高安朝常

1025 ものよおもはしゆる秋になてさらめ庭にちり飛るきりの一葉

義 高安朝常

1026 稲葉なみたててふきすぎる風のけしき見ちしゆさ秋になたす

礼 伊江朝薫

1027 そよそよと荻に吹きすぎる風と秋の音つれの始さらめ

智 伊江朝薫

1028 庭の桐の葉やちりそめてをても扇子手はなしゆる時やないらぬ

信 山城宗蔭

1029 めくて秋くれは三日月の影も思みなしかやゆらすみて見ゆさ

秀 知念政置

1030 にや又この年もなかはり過てもものよ思はしゆる秋になため

秀 松嶋朝京

1031 庭の草の葉も露しけくおちやさいつの間に秋やめくてきちやか

秀 糸満朝義

1032 荻の葉におきゆる露のしら玉とめくてぎやる秋のしるしさらめ

佳 高江洲昌壯

1033 朝夕手はなさぬ扇き与所なちゆてすたすと暮す秋になたさ

佳 山田有度

1034 ふみちゆんていふたる人のいこと葉も秋の涼風にちりて飛さ

佳 比嘉春株

1035 節や節のこと秋になてからや手になれし扇もまれにとゆさ

点者 伊江朝真

1036 秋とてやりいちも名はかりとやゆる夏よりもあつさ暮しかねて

大正二年八月一七日付「新報」第四七六二号

日曜会

新秋 当座

点者伊江朝眞

仁

高安朝常

1037 ものよおもはしゆる秋になてさらめ庭にちり残るきりの一葉

義

高安朝常

1038 稲葉なみたててふきすぎる風のけしき見ちしゆさ秋になたす

礼

伊江朝薫

1039 そよそよと菝に吹きすぎる風と秋の音つれの始さらめ

智

伊江朝薫

1040 庭の桐の葉やちりそめてをても扇子手はなしゆる時やないらぬ

信

山城宗蔭

1041 めくて秋くれは三日月の影も思みなしかやゆらすみて見ゆさ

秀

知念政直

1042 にや又この年もなかははり過て物よ思はしゆる秋になため

秀

松島朝景

1043 庭□草の葉も露しけくおちゆさいつの間に秋やめくてききやか

秀

糸満朝義

1044 萩の葉におぎゆる露のしら玉とめくてきやる秋のしるしさらめ

佳

高洲昌壯

1045 朝夕手はなさぬ扇与所なちゆてすたすと暮す秋になたさ

佳

山田有度

1046 ふみちゆんていふたる人のいこと葉も秋のすた風にちりて飛さ

佳

比嘉春株

1047 節や節のこと秋になてからや手になれし扇もまれにとゆさ

点者伊江朝新

1048 秋とてやりいちも名はかりとやゆる夏よりもあつさ暮しかねて

大正二年八月一九日付「沖毎」第一六五三号

三六会

紫陽草

兼題

点者

當銘朝顯

仁

神山處如

1049 急く駒とみて見る程もきよらさ野辺のあちさゐの花のさかり

義

眞喜屋康治

1050 庭のあちさいの雪の花むらの月に打ち向かて咲ちやるきよらさ

礼

勝連貞

1051 暗闇にてんすかくれないぬものや庭のあちさいの花のすかた

智

翁長良才

1052 見せらなやあれにあちさいの花の雪のこと真白咲る姿た

信

花城朝忠

1053 おけて見てわらへあちさいの花の夜明きしらしらと□るしほら

しや

秀

新崎興顯

1054 いつよりも増て庭の阿ちさいの打ち向て咲る花の美さ

秀

新崎興顯

1055 夜明□しらしらと庭のあちさいの露かみて花の咲ちやる美さ

秀

花城朝忠

1056 宵の露おけて咲るあちさいや木の間もる月の影よともて

佳

池宮城光裕

1057 あちさいよてんすよらて花咲ちゆい人に生りとて不和にするな

1058 いろいろにかわるあちさいの花や世の中の人の心さらめ
点者 當銘朝顯

大正二年八月二二日付「新報」第四七六七号

琉歌研究会

懸命恋 兼題 比嘉賀徳 仲濱政模共撰

一 川平恵許

なるかならぬか身かいのち返事の一言葉にかかてをすか

二 川平恵許

思ひ極めやい忍ふ夜や無蔵か云言葉にかかる露のいのち

三 古堅栄秀

焦れはて死なは思み知ゆらあれか身にあまる思ひむねにつつて

四 仲里政功

衾れ身か心思み知やい呉らな日々にやせはてて死なんうちに

四 山里全則

思ひ身に余て消え果てる命里が露程も知ちなやすか

四 上間正才

露程も無蔵か知らぬかや我身の命までかかる思ひやすか

四 饒平名智寶

夜々に身はやつり命までかけて忍ふ我か衾れしらなやすか

五 山口全則

義理恥もすてて忍て行く我身にのよて玉の緒のおしさあゆか

六 山里景昇

□ぬ□面に物ゆ思みくたち日々にやしはてる我身の苦れしや

七 川平恵基

命さへかけて思れはも無蔵やあはれ我かたのみ聞や呉らぬ

1069 くりかへしかへし通て自由ならぬいのちまてかかる思ひやすか
七 眞榮里元璋

八 比嘉賀忠

1070 あはれ夜昼も命までかけて焦れゆる思ひしらなやすか
点者比嘉賀徳

1071 与所しれぬことにもたちある文の返事のよしあしにかかる命
点者比嘉賀徳

1072 逢ぬいたつらに在命てのしゆかまよて行く先やいのちかきり
点者比嘉賀徳

大正二年八月三一日付「沖毎」第一六六五号

琉歌研究会

盃 兼題 比嘉賀徳 仲濱政模 共撰

一 川平恵許

1073 かはす盃に千万代かけて結ひかためゆる糸の御縁

一 山里景昇

1074 世の為ゆ尽ち得たる盃や誉れ世にのこす我屋の宝

二 眞榮里元璋

1075 友部打揃て一人語れ語れ酌る盃や百氣のひゆさ

二 喜瀬喜長

1076 めくる盃にむね中の誠互にうち明けてかたる嬉しや

三 川平恵許

1077 勝いくさめしよち戻るとてやり呉たいる盃に吞むか嬉しや

四 山里景昇

1078 あかぬ交の友部はい揃てかはす盃に百氣のたさ

五 饒平名智寶

1079 晩酌にたのむ玉のさかつきやいつも我か手もとはなくれしや

1080 点者 比嘉賀徳
君か御恵の菊のさかつきやつきゆる酒までも千代の匂ひ

1081 点者 仲濱政模
御奉公しやるおかけこかね盃ゆいたたきゆてけふや笑ひ誇ひ

大正二年九月二日付「沖毎」第一六六号

燕居会 八月 羽地村字眞喜屋

納涼 兼題 諸見里朝奇

一 漱石

1082 たち寄やひ見れば夏も与所なしゆさ豊むととろきの瀧の麓

二 翠童

1083 岩間から落る瀧のしら糸や手にやとらなても涼くなゆさ

三 艾史

1084 琴の音よたてる松山の風に夏も与所なちゆて遊ぶうれしや

四 珀雲

1085 てかやう押つれて数久田ととろきの瀧のもとたよてすたて遊は

五 漱石

1086 夏の眞昼間もあつさ忘れゆさ豊むととろきの瀑布によれば

六 岩木

1087 てかやう谷川の木かけ尋やひ眞昼間のあつさすたて遊は

七 晶夫

1088 てかやう押つれて豊むととろきに眞昼間のあつさ流ち遊は

大正二年九月三日付「新報」第四七七八号

琉歌研究会

盃 兼題 比嘉賀徳 仲濱政模共撰

1089 川平恵許
かはす盃に千万代かけて結ひかためゆる糸の御縁

1090 山里景昇
世の為ゆ尽ち得たる盃や誉れ世にのこす我屋の宝

1091 眞榮里元璋
友部打揃て一人語れ語れ酌る盃や百氣のひゆさ

1092 喜瀬喜長
めくる盃にむね中の誠互にうち明けてかたる嬉しや

1093 川平恵基
勝いくさめしよち戻るつとてやり呉たいる盃に呑むか嬉れしや

1094 あかぬ交の友部はい揃てかはす盃に百氣のたさ

1095 饒平名智實
晩酌にたのむ玉のさかつきやいつも我が手もとはなしくれしや

1096 点者比嘉賀徳
君か御恵みの菊の盃やつきゆる酒までも千代の匂ひ

1097 点者仲濱政模
御奉公しやるおかけこかね盃ゆいたたきゆて今日や笑ひ誇ひ

大正二年九月四日付「新報」第四七七九号

三六会

月前契恋 兼題 當銘朝頼撰

仁 翁長良才

1098 思ひ有明の月に打ち向て契ることの葉や替て呉るな

1099 二人か中川に思ひ照り勝る月に鴛鴦の契りしやひら

義 翁長良才

兼題

兼題

兼題

兼題

兼題

兼題

兼題

兼題

兼題

1100 礼 神山處如
契る言の葉や散り飛ぬことに口留て置かな月のかつら

1101 智 高江洲昌壯
照る月に便て心ある二人か契る言の葉のいつも朽ゆめ

1102 信 花城朝忠
思ひしみしみに契る真心や誰か知ゆか夜半の月の外に

1103 秀 花城朝忠
すみ渡る月に肝の門よ照らち契るいことはや替て呉るな

1104 秀 花城朝忠
月も知り召せら思ひ打ちあけてあとかきて契る二人かこころ

1105 秀 花城朝忠
いつも替るなやうありあきの月も知り召せらたいもの二人か契り

1106 秀 山里守祥
照る月に向てちかひしち互にいちく儘なゆる契りしやひら

1107 秀 真喜志康治
語らたることに誠とんやらは月に打ち向て契り結は

1108 秀 高江洲昌壯
さやか照る月や鏡てやりともていつも替るなやう二人か契り

大正二年九月五日付「新報」第四七八〇号
三六会

憂喜同類 兼題

當銘朝穎撰

仁

大山朝眞

1109 義 世話ことのもて喜ひのあても共に先立ちゆす涙さらめ

池宮城光裕

1110 礼 山里守祥
世話も喜ひも互に儘ともしり浮世ならわしの人の心

1111 智 池宮城光裕
浮世ものことの世話も喜も替ることないさめ人の肝や

1112 信 勝連貞
我身に引ちかへち与所の上も思ひは世話も喜も共になゆさ

1113 秀 眞喜志康治
喜ひも共に世話も打合ち浮世やすやすと渡て行さ

1114 秀 眞喜志康治
世わも喜も共にしゆるものや友間柄外にたかすをゆか

1115 秀 花城朝忠
世話も喜も共にしゆるものやぬちもぬかりらぬ間柄さらめ

1116 秀 花城朝忠
浮世人間や世話も喜も替ることないさめ我身の肝に

1117 秀 神山處如
世話も喜も我か肝のことに替りないぬものやちゆ兄弟さらめ

1118 点者
知る人の中や世わも喜もよらて語らゆす要目さらめ

1119 点者
嬉しやある時もなつかしやるはしゆも先立ちゆる涙やひとつさ

大正二年九月八日付「新報」第四七八三号

琉歌研究会

兼題

秋夕雨

比嘉賀徳 仲濱政摸共撰

1120 一 物ゆ思み増ゆる秋の夕間暮に軒端降る雨の我肝しみて

眞榮里元璋

1121 二 川平惠許
思ひ身にしみてつらさいや増ゆさ秋の夕間暮の雨の雫

1122 三 喜瀬喜長
物ゆ思はしゆる夕間暮の空にしみしみとふゆる秋の時雨

1123 四 山里景昇
聞くもさひしさを夕間暮の空に軒端音たてる秋の時雨

1124 四 饒平名智實
軒端降りしける音も身にしみて聞くもさひしさを秋の夕雨

1125 四 山口全則
淋しさと増ゆる秋の夕間暮にしみしみと降ゆる雨の音声

1126 四 川平惠基
さひしさと増ゆる夕間暮の空に音たてて降ゆる秋の夕雨

1127 五 上間正才
聞くもさひしさを庭の紅葉に音たてて降ゆる秋の夕雨

大正二年九月九日付「沖毎」第一六七三号

琉歌研究会

秋夕雨 兼題 比嘉賀徳 仲濱政模 共撰

1128 一 眞榮里元璋
物ゆ思増ゆる秋の夕間暮に軒端降る雨の我肝しみて

1129 二 川平惠許
思ひ身にしみてつらさいや増ゆさ秋の夕間暮の雨の雫

1130 三 喜瀬喜長
物ゆ思はしゆさ夕間暮の空にしみしみとふゆる秋の時雨

1131 四 山里景昇
聞くもさひしさを夕間暮の空に軒端音立てる秋の時雨

1132 四 饒平名智實
軒端降りしける音も身にしみて聞くもさひしさを秋の夕雨

1133 四 山口全則
淋しさと増ゆる秋の夕間暮にしみしみと降ゆる雨の音声

1134 四 川平惠許
さひしさと増ゆる夕間暮の空に音たてて降ゆる秋の夕雨

1135 五 上間正才
聞くもさひしさを庭の紅葉に音たてて降ゆる秋の夕雨

大正二年九月一〇日付「新報」第四七八五号

三六会

女郎花 當銘朝穎撰

1136 仁 翁長良才
のかす女郎花秋の野に一人打ち笑ひ笑ひ誰よまぢゆか

1137 義 翁長良才
打ち笑て咲る野辺の女郎花いつの夜の露に紐やとちやか

1138 礼 勝連貞
物よ思はしゆさ花の女郎花いはん色含てさちやる姿

1139 智 眞喜志康治
あたら女郎花まし立て置かな風にもまれゆす惜さあもの

1140 信 翁長良才
恋しをみなへし立ちよとて見れば打笑て我袖引かんはかり

1141 秀 安江洲昌壯
のかす女郎花いはん色含て涙玉散らす秋の野辺に

1142 秀 安江洲昌壯
野辺の女郎花秋に紐とけていはん色含む花のきよらさ

1143 秀 神山處如
係る白露に袖やぬらすともしはし女郎花手折りすらな

秀 山里守祥

1144 のかす女郎花あたに吹く風の押す儘になれて朝夕なひく

秀 山里守祥

1145 我か庭に移ち朝夕詠みらな野辺の女郎花はなの色香

秀 池宮城光裕

1146 秋の野に咲る花の女郎花押す風になひく色の美さ

点者

1147 あたらまさかへの花の女郎花あたし野の露にぬれるおしさ

大正二年九月一二日付「新報」第四七八七号

燕居会 八月 羽地村字真喜屋

納涼 兼題 諸見里朝奇撰

1148 一 たち寄やひ見れば夏も与所なしゆさ豊むととろぎの瀑布の麓

二 翠董

1149 三 岩間から落る瀧のしら糸や手にやとらなても涼くなゆさ

三 艾叟

1150 四 琴の音よたてる松山の風に夏も与所なちゆて遊ぶうれしや

四 珀雲

1151 五 てかやう押つれて数久田ととろぎの瀧のもとたゆてすたて遊は

五 嗽石

1152 六 夏の真ひる間もあつさ忘れゆさ豊むととろぎの瀧によれば

六 岩木

1153 てかやう谷川の木かけ尋やひ真屋間のあつさすたて遊は

1154 七 てかやう押つれて豊むととろぎに真屋間のあつさ流ち遊は

晶夫

大正二年九月一八日付「新報」第四七九三号

琉歌研究会

海村 兼題 比嘉賀徳 仲濱政摸共撰

一 山口全則

1155 海や蔵なちゆていろいろのたから日々にとて村のさかるすほら

しや

二 川平恵許

1156 浦々のたからとてもつくれらぬ海たよるむらやとみのもと

三 川平恵許

1157 海士の釣舟の数にしられゆさとよむ糸満のむらのさかり

四 川平恵基

1158 いろいろのたからとてもつくれらぬ海たよるむらやとみのもと

い

五 眞榮里元璋

1159 昔とやかはてすなとりも遊て海村のとみもまさて行ゆさ

六 上間正才

1160 大嶽やくしやて白浜や前なち真かやかやふきのなたる美さ

点者比嘉賀徳

1161 年々にさかる美代の民草に三重城のはまも村になたさ

大正二年九月一八日付「沖毎」第一六八二号

日曜会 九月十四日

活動写真 兼題 点者 伊江朝眞大人撰

1171 くりかへち見ちも写真てや思まぬ芝居よりまさるかけのをとり
甲 川平恵許
乙 稲福全名

1170 物よいやん計り手ふり足なみもしほらし影うつち躍る清さ
佳 知念積昌
大正二年九月一九日付「新報」第四七九四号
日曜会 九月十四日
活動写真 兼題 伊江朝真大人撰
甲 川平恵許
乙 稲福全名

1169 美旗うしたててかちいくさしきやるありしささまのかけに見
ゆさ 佳 知念積昌

1168 影んてといふすか人よりもまさていろいろの躍見るか嬉しや
秀 眞榮里元璋
佳 勝連貞

1167 活る人のことに影にわさしみて誰かす初たか人目さまち
秀 兼濱朝珂

1166 影といやんあれは影んても思ぬいけるふるまひの仕さま見れは
秀 兼濱朝珂

1165 うつし絵とやすか燈火の影に動ち働ちも自由になしゆさ
戊 糸満朝義

1164 写真てもおまぬ人のまねしみて見ちも又みほしや影のをとり
丁 稲嶺盛治
丙 眞榮里元璋

1163 誰かす燈火の影とおみなしゆかうつくしや躍る花の童
丙 眞榮里元璋

1162 くりかへち見ちも写真てや思まぬ芝居よりまさるかけのをとり
甲 川平恵許
乙 稲福全名

1181 今宵よりあきややてりまさてたふれ兼ていくまちやる十五夜御
月 丙 山川朝赴

1180 名に立る明日やきやほとりましゆら今宵から月の影口澄て
乙 金武正宣
甲 具志頭朝香
大正二年九月一九日付「沖毎」第一六八三号
日曜会 九月十四日
十四日月 当座 伊江朝真大人

1179 物よいやん計り手ふり足なみもしゆらし影うつち躍る清さ
佳 知念積昌

1178 美旗うしたててかちいくさしきやるありしささまのかけに見
ゆさ 佳 勝連貞

1177 影んてといふすか人よりもまさていろいろの踊見るか嬉しや
秀 眞榮里元璋

1176 活る人のことに影に業しみて誰かす初たか人目さまら
秀 兼濱朝珂

1175 影といやんあれは影んても思ぬいけるふるまひの仕さま見れは
戊 糸満朝義

1174 うつし絵とやすか燈火の影に動ち働ちも自由になしゆさ
丁 稲嶺盛治

1173 写真てもおまぬ人のまねしみて見ちも又みほしや影のをとり
丙 眞榮里元璋

1172 誰かす燈火の影とおみなしゆかうつくしや躍る花の童
丙 眞榮里元璋

1182 くもの糸たいんすさやかなくて見よさ七日かさひたる月とやすか

丁 稻福全名

名に立るあきやの雨ふるはきやしゆか澄み渡る今宵詠み遊は

戊 松嶋朝京

今宵てる月のかげ見ちもしゆさ明日や名に立る秋の最中

秀 大山朝眞

満ちたらぬ月もかん美さあもの明日やてり増ら十五夜御月

佳 與那原良儀

あきやや名に立ちゆる最中やてからと今宵から月もすみて□ゆ

ら

点者 伊江朝眞

1187 てり清さあてもななめふりするな明日やいくまちやる十五夜た

いもの

大正二年九月二〇日付「新報」第四七九五号

日曜会 九月十四日

十四日月 当座

甲 伊江朝眞大人撰 具志頭朝香

1188 名に立る明日やきやほとりましゆら今宵から月の影も澄て

乙 金武正宣

今宵よりあきややてりまさてたふれ兼ていくまちやる十五夜御

月

丙 山川朝赴

くもの糸たいんすさやかなて見よさ七日かさひたる月とやすか

丁 稻福全名

名に立つるあきやの雨ふらはきやしゆか澄み渡る今宵詠み遊は

1192 今宵てる月のかげ見ちもしゆさ明日や名に立る秋の最中

戊 松島朝京

1193 満ちたらぬ月もかん美さあもの明日やてり増ら十五夜御月

秀 大山朝眞

1194 あきやや名に立ちゆる最中やてからと今宵から月もすみて照ゆ

佳 與那原良儀

ら

点者 伊江朝眞

1195 てり清さあてもななめふりするな明日やいくまちやる十五夜た

いもの

大正二年九月二一日付「沖毎」第一六八五号

琉歌研究会

兼題

点者 比嘉賀徳 仲濱政模共撰

一 山口全則

海や蔵なちゆていろいろのたから日日にとて村のさかるしほら

しや

二 川平恵許

1196 浦浦のたからとてつくれらぬ海たよるむらやとみのもとい

三 川平恵許

1198 海士の釣舟の数にしられゆさとよむ糸満のむらのさかり

四 川平恵基

1199 いろいろの宝とてつくれらぬ海たよるむらやとみのもとい

五 眞榮里元璋

1200 昔とやかはてすなとりも□て海村のとみもまさていちゆさ

六 上間正才

1201 大嶽やくしやて白浜や前なち真かやかやふきのなたる美さ

点者 比嘉賀徳

1202 年年にさかる美代の民草に三重城のはまも村になたさ

大正二年九月二八日付「沖毎」第一六九一号

琉歌研究会 九月廿四日

船中眺望 当座 比嘉賀徳 仲濱政摸共撰

一 川平惠許

1203 道の嶋嶋も送り迎しやかな七嶋なたやすく渡る嬉しや

二 山口全則

1204 船酔もわすて眺めほれしゆさ雲と見まかゆる沖の小嶋

三 古堅榮秀

1205 静はい過る船はたに出て浦々の景色見るが嬉しや

四 山里景昇

1206 空や澄み渡り過る我か船にあかぬ詠めゆさ瀬戸の景色

四 川平惠基

1207 船路はるはると詠めほれしちやさ波の花ちれる残波みさき

五 仲里政功

1208 はゆる船とめてしはし詠めらな沖にうちやかゆる嶋の景色

五 饒平名智實

1209 四方の嶋嶋も自由に詠めゆさ船路はるはると瀬戸の景色

六 比嘉賀忠

1210 波も押そへて走り行く船に四方の嶋嶋の浦の美さ

大正二年九月二九日付「新報」第四八〇三号

琉歌研究会 九月廿四日

船中眺望 当座 比嘉賀徳 仲濱政摸共撰

川平惠許

1211 道の島々も送り迎しやかな七島なたやすく渡る嬉しや

二 山口全則

1212 船酔もわすて眺めほれしゆさ雲と見まかゆる沖の小島

三 古堅榮秀

1213 静はい過る船はたに出て浦々の景色見るか嬉しや

四 山里景昇

1214 空や澄み渡り過る我か船にあかぬ詠めゆさ瀬戸の景色

四 川平惠基

1215 船路はるはると詠めほれしちやさ波の花ちれる残波みさき

五 仲里政功

1216 はゆる船とめてしはし詠めらな沖にうちやかゆる島の景色

五 餘平名智實

1217 四方の島々も自由に詠めゆさ船路はるはると瀬戸の景色

六 比嘉賀忠

1218 波も押そへて走り行く船に四方の島々の浦の美さ

大正二年九月三〇日付「沖毎」第一六九三号

琉歌研究会

林間月 兼題 比嘉賀徳 仲濱政摸共撰

喜瀬喜長

1219 嶺の松原の松か枝にかかる豊む夜の月のかけの美さ

二 川平惠基

1220 東りあかからちのきやかゆる月の峯の松原にかかるきよらさ

三 川平惠基

1221 雲間あかからちのきやかゆる月の松林もれるかけのきよらさ

四 川平恵許

1222 琴の音ゆたちゆる松の小林につなかれていまいら夜半の御月

五 古堅榮秀

1223 小林にかかる秋の夜の御月急ぎのきやからな待の苦しや

六 上間正才

1224 林から漏れる影たいんすかはてさやか照り渡る秋の御月

点者比嘉賀徳

1225 峯の松原の木の間あかからちのきやかゆる月の影の清さ

大正二年一〇月一日付「新報」第四八〇五号

琉歌研究会

林間月 兼題 比嘉賀徳 仲濱政模共撰

一 喜瀬喜長

1226 嶺の松原の松か枝にかかる豊む夜の月のかけの美さ

二 川平恵基

1227 東りあかからちのき出ゆる月の峯の松原にかかるきよらさ

三 川平恵基

1228 雲間あかからちのちやかゆる月の松林もれる影のきよらさ

四 川平恵許

1229 琴の音ゆたちゆる松の小林につなかれていまいら夜半の御月

五 古堅榮秀

1230 小林にかかる秋の夜の御月急ぎのちやからな待の苦しや

六 上間正才

1231 林から漏れる影たいんすかわてさやか照り渡る秋の御月

点者比嘉賀徳

1232 峯の松原の木の間あかからちのきやかゆる月の影の清さ

大正二年一〇月八日付「新報」第四八二二号

琉歌研究会

擣衣 兼題 比嘉賀徳 仲濱政模共撰

一 上間正才

1233 肌寒くなれば音も身にしみて宿ことにたたく夜半のきぬた

二 山口全則

1234 肌寒くなれば旅にまいる里にもたさてやりともて衣うちゆら

二 比嘉賀忠

1235 誰るに着ちてやり思ひ中巻にまきこめておちゆか夜半のきぬた

三 山口全則

1236 旅にまいる里かまい近くなたら夜屋もかけてきぬたうちゆす

四 餘平名智實

1237 思ひ身にしみて聞くもつれなさや一人寝のそらの夜半のきぬた

四 川平恵基

1238 誰るゆ待ちわひて思ひ有明の月影にうちゆか夜半のきぬた

五 川平恵許

1239 たよりかせあとて知らさな□里にまちわひてたたく夜半のきぬた

五 川平恵許

1240 誰か宿かやゆらおもひ有明の月影にたたく夜半の砧

点者比嘉賀徳

1241 聞もさひしさや肌寒くなればあまくまにたたく夜半の砧

点者仲濱政模

大正二年一〇月八日付「沖毎」第一七〇一号

琉歌研究会

擣衣 兼題

比嘉賀徳 仲濱政模共撰

一 上間正才

肌寒くなれば音も身にしてみて宿ことにたたく夜半のきぬた

二 山口全則

肌寒くなれば旅にまいる里にもたさてやりともて衣うちゆら

二 比嘉賀忠

誰るに着らてやう思ひ中巻にまきこめてうちゆら夜半のきぬた

三 山口全則

旅にまいる里かいまい近くなたら夜昼もかけてきぬたうちゆす

四 饒平名智寶

思ひ身にしてみてもつれなさや一人寐のそらの夜半のきぬた

四 川平惠基

誰ゆ待ちわひて思ひ有明の月影にうちゆか夜半のきぬた

五 川平惠許

たよりかせあとて知らさなや里にまちわひてたたく夜半のきぬた

点者比嘉賀徳

誰か宿かやゆらおもひ有明の月影にたたく夜半のきぬた

点者仲濱政模

聞くもひさしさや肌寒くなればあまこまにたたく夜半のきぬた

1250

1249

1248

1247

1246

1245

1244

1243

1242

大正二年一〇月二日付「沖毎」第一七一三号

三六会

十月六日

菊花待開 当座

点者當銘朝頼

高江洲昌壯

1261

1260

1259

1258

1257

1256

1255

1254

1253

1252

1251

いつか紐とけて打笑て咲ちゆら朝夕待兼る庭の小菊

花城朝忠

いつか紐とけて朝夕なかみゆら嬉しこと菊の千代のすかた

勝連貞

朝夕まちなかぬるましようちの菊やいつかひもとけて花やさちゆら

眞喜志康治

待兼る菊やはついたりやすか情けある露のさかち呉らな

嵩原松亭

朝夕さもわ身や嬉しこときくのうち笑て咲る節と待る

大正二年一〇月二日付「沖毎」第一七一四号

琉歌研究会

杖 兼題

比嘉賀徳 仲濱政模共撰

一 古堅榮秀

老の身の自由にあ□□□の景色遊て詠めゆす杖の□蔭

二 饒平名智寶

若さたる間や鹿相にしやるくしやん老の身になればはなしくれ

しや

三 山口全則

うかとしちとたる山底のたしちや老の坂のほるたよりなたさ

四 喜瀬喜長

老の坂のほる便りなて行ゆす手になれし杖のなさけさらめ

五 上間正才

くしやんとんつけは老のさくひらも若狭道心自由になゆさ

五 川平惠許

くしやんつくほとどの年やあらねともなれぬ旅道やたのて行ゆさ

1262 百としの坂にのほる年寄のはなさらぬものやくしやんさらぬ
点者比嘉賀徳

大正二年一〇月二五日付「新報」第四八二八号

琉歌研究会

杖 兼題

比嘉賀徳 仲濱政摸共撰

一 古堅榮秀

老の身の自由にあまこまの景色遊て詠めゆす杖の御蔭

二 餘平名智寶

若さたる間や倉相にしやるくしやん老の身になればはなしくれ
しや

三 山口全則

うかとしちとたる山底のおしちや老の坂のほるたよりなたさ

四 喜瀬喜長

老の坂のほる便りなて行ゆす手になれし杖のなさけさらぬ

五 上間正才

くしやんとんつけは老のさくひらも若狭道心自由になゆさ

五 川平恵許

くしやんつくほとどの年やあらねともなれぬ旅道やたのて行ゆさ

点者比嘉賀徳

1269 百としの坂にのほる年寄のはなさらぬものやくしやんさらぬ

大正二年一月七日付「新報」第四八四〇号

琉歌研究会

惜秋 兼題

比嘉賀徳 仲濱政摸共撰

一 上間正才

1270 残るもみちはも風にちりはててにや又この秋も暮れて行め

二 古堅榮秀

1271 野辺のすすきはの打招き招き招きわも秋や暮れて行ゆさ

三 川平恵基

1272 雲も色かわて紅葉もちりてにや又此秋も暮れて行ゆさ

三 川平恵許

1273 月も紅葉をしむわかこころしらな行き暮れる秋のらめしや

三 山口全則

1274 あまこまの紅葉見はてらぬうちにくれはてて行ゆる秋のをしさ

四 饒平名智寶

1275 錦おりなちやる紅葉もちりて暮れはてて行ゆる秋のをしさ

四 比嘉賀忠

1276 あかぬ詠めたる紅葉もちりて夢の間にくれる秋のをしさ

五 眞榮里元璋

1277 暮れて行く秋の名残かや今宵いつよりも月のまさて照ゆす

五 仲里政功

1278 四方の紅葉も詠めらぬしちゆて夢の間に暮れる秋のをしさ

点者仲濱政摸

1279 小男鹿もむしも朝夕なきかかてて行く秋や引ゆとめれ

大正二年一月二二日付「沖毎」第一七三四号

日曜会 十一月九日

夕霞 兼題

点者伊江朝眞大人撰

仁 山城正常

1280 霞玉ちらす夕間暮のそらや埋火の外の友やなひさめ

義 兼島景福

1281 ねとこさためたる池の水鳥のあられふみつみてさわき鳴さ

礼 勢理客宗宣

1282 夕間暮のそらに凧とつれて霞ふるおとの我肝しみて

智 大山朝眞

1283 夕間暮のそらのあられふる音に軒の夕ささめのさわき飛さ

信 仲濱政模

1284 夕間暮とつれて霞ふてくれはかにもひさしさめ草のいほり

大正二年一月三日付「沖毎」第一七三三号

日曜会 十一月九日

夕霞 兼題 点者伊江朝眞大人撰

佳 翁長良才

1285 夕間暮とつれて我肝さらさらと窓にくたけゆる玉のあられ

秀 知念積昌

1286 聞も寒しさや夕間暮と列てまどに音たててふゆるあられ

秀 名護朝直

1287 ぬちとめやならに夕間暮とつれて庭にふりつみる玉のあられ

秀 勢理客宗宣

1288 寒さこころるさ物思みつめららぬ我肝夕間暮の窓の霞

佳 當銘朝頼

1289 窓の戸しまりやしはし待てわらへあられちる玉のきよらさあも

の 佳 城間恒有

1290 世果報代のつつく兆しさみ夕の霞ちる玉の音のたかさ

大正二年一月四日付「新報」第四八四七号

琉歌研究会

浜砂 兼題

比嘉賀徳 仲濱政模共撰

1291 年波と共によりまりまり思事やあまた浜の真砂

一 喜瀬喜長

1292 年からへてをれはおもことやあまたよみもつくさらぬ浜の真砂

二 川平惠基

1293 あきやう我か肝や浜の真砂かやよせる世話波のはてもないらぬ

三 眞榮里元璋

1294 思事や浜の真砂ほどあてもかなはゆるむのや中の一粒

四 上間正才

1295 ゆきかひの人にふましゆすもおしき雪に見まかゆる浜の真砂

五 仲里政功

1296 波にあらはれる浜の白砂に遊ぶわか肝も清らくなゆさ

六 古堅榮秀

1297 浜の真砂はよまるともよみもつくさらぬ人の思ひ

比嘉賀忠

大正二年一月四日付「沖毎」第一七三六号

琉歌研究会 兼題 比嘉賀徳 仲濱政模共撰

1298 年波と共によりまさりまさり思事やあまた浜の真砂

一 喜瀬喜長

1299 年からへてをれはおもことやあまたよみもつくさらぬ浜の真砂

二 川平惠基

1300 あけやう我か肝や浜の真砂かやよせる世話波のはてもないらぬ

三 眞榮里元璋

1301 四 上間正才
思事や浜の真砂ほどあてもかなわゆるものや中の一粒

四 仲里政功

1302 ゆきかひの人にふましゆすもおしき雪に見まかゆる浜の白砂

五 古堅榮秀

1303 波にあらはれる浜の白砂に遊ふわか肝も清くなゆさ

六 比嘉賀忠

1304 浜の真砂はよまるともよみもつくらさぬ人の思ひ

大正二年一月一七日付「沖毎」第一七三九号

日曜会 十一月九日

菊 当座 点者伊江朝眞

仁 稻福全名

1305 ならふはなないさめ嬉しこときくの匂ひ立ちまさる千代の姿

義 岸本賀雅

1306 宵の間の露の情けある故とませかきの菊の紐やとちやる

礼 松島朝京

1307 春に咲くはなの色よりもまさて嬉しこと菊の花のきよらさ

智 渡慶次朝宣

1308 美代の長月に嬉しこと菊の九重の御庭に咲る美さ

信 高江洲昌壯

1309 素立たる人のこころくて菊のいろいろに咲る花の美さ

秀 金武正宣

1310 いつれうちよらて歌よみの筵菊もよろこひの色よ増さ

秀 山城宗得

1311 さかちおみしゆさ昔しもうこしの菊よ素立たる人のこころ

1312 秀 比嘉賀徳
まどにふく風も千代の匂立ゆさ嬉しこと菊のはなのさかり

佳 比嘉賀慶

1313 霜や雪かみて年もしら菊の花とむすはなや千代のちぎり

佳 比嘉春株

1314 垣の内外にいろいろの菊の千代のいろそよる今宵のうたけ

佳 具志川朝及

1315 菊よやしなやひ千年までむちやる人のおもかけや花にのこて

点者伊江朝眞

1316 初霜のふても打笑てきくの千世の匂ひ立さ歌の筵

大正二年一月一九日付「新報」第四八五二号

日曜会 十一月九日

菊 当座 稻福全名

仁 岸本賀雅

1317 ならふ花ないさめ嬉しこと菊の匂ひ立ちまさる千代の姿

義 松島朝京

1318 宵の間の露の情けある故とませかきの菊の紐やとちやる

礼 渡慶次朝宣

1319 春に咲く花の色よりもまさて嬉しこと菊のはなのきよらさ

智 高江洲昌壯

1320 美代の長月に嬉しこときくの九重の御庭に咲る美さ

信 金武正宣

1321 素立たる人のこころくて菊のいろいろに咲るはなの美さ

秀 山城宗得

大正二年一月二日付「新報」第四八五四号

日曜会

十一月九日

菊 当座

点者伊江朝眞

秀

金武正宣

いつれうちよらて歌よみの筵菊もよろこひの色よ増さ

秀

山城宗得

さかちおみしゆさ昔しもの菊よ素立たるひとのこころ

秀

比嘉賀徳

まどにふく風も千代の匂立ゆさ嬉しこときくの花のさかり

佳

比嘉賀慶

霜や雪かみて年もしら菊の花とむすはなや千代のちぎり

佳

比嘉春株

垣の内外にいろいろの菊の千代の色そよる今宵のうたけ

佳

具志川朝及

菊よやしなやひ千年までむちやる人のおもかけや花にのこて

兼題

点者伊江朝眞

初霜のふても打笑てきくの千世の匂ひ立さ秋の筵

大正二年一月二日付「新報」第四八五四号

琉歌研究会

冬月 兼題

比嘉賀徳 仲濱政模共撰

一

川平恵許

詠めれはつめて寒さいやましゆさ雪の上に照ゆる冬の御月

二

川平恵許

見るも寒けさや雪の御衣はつて雪の上に照ゆる冬の御月

三

眞榮里三元璋

澄み渡る月も淋しさと増ゆる寒さ身にしみる冬のそらや

三

喜瀬喜長

照り美さあても詠め人もをらぬ寒さ身にしみる冬の御月

四

饒平名智實

詠めれはつめて寒さいやましゆさ夜半にさへ渡る冬の御月

四

川平恵基

詠めれはつめて寒さいやましゆさ澄みて照り渡る冬の御月

五

上間正才

照り渡る影も身にしみて行ゆさ雪の上にさゆる冬の御月

兼題

点者仲濱政模

雪つもる山にいつる月影やなかめゆる程に寒くなゆさ

大正二年一月二六日付「新報」第四八五八号

日曜会

夕霞 兼題

仁

山城正常

霞玉ちらす夕間暮のそらや埋火の外の友やなひさめ

義

兼島景福

ねとこさためたる池の水鳥のあられふりつみてさわき鳴さ

礼

勢理客宗宣

夕間暮のそらに凧とつれて霞ふるおとの我肝しみて

智

大山朝眞

夕間暮のそらのあられふる音に軒の夕すすめのさはち飛さ

信

仲濱政模

夕間暮とつれて霞ふてくれはかにもさひしさめ草のいほり

秀

勢理客宗宣

寒さこころるさ物思みつめららぬ我肝夕間暮の窓の霞

1343 秀 名護朝直
ぬちとめやならに夕間暮とつれて庭にふりつみる玉のあられ

1344 秀 知念績昌
間も寒しさや夕間暮と列てまどに音たててふゆるあられ

1345 佳 翁長良才
夕間とつれてわ肝さらさらと窓にくたけゆる玉のあられ

1346 佳 當銘朝穎
窓の戸しまりやしはし待てはらべあらしちる玉のきよらさあも
の 佳 城間恒有

1347 世界報代のつつく兆しさめ夕の霞ちる玉の音のたかさ

大正二年一月二六日付「沖毎」第一七四七号

琉歌研究会

冬月 兼題 比嘉賀徳 仲濱政模共撰

一 川平恵許

詠めれはつめて寒さいやましゆさ雪の上の照ゆる冬の御月

二 川平恵許

見るも寒けさや雲の御衣はつて雪の上の照ゆる冬の御月

三 眞榮里元璋

澄み渡る月も淋しさと増ゆる寒さ身にしみる冬のそらや

三 喜瀬喜長

照り美さあても詠め人もをらぬ寒さ身にしみる冬の御月

四 饒平名智寶

詠めれはつめて寒さいやましゆさ夜半にさへ渡る冬の御月

四 川平恵基

1353 詠めれはつめて寒さいやましゆさ澄みて照り渡る冬の御月

五 上間正才

照り渡る影も身にしみて行ゆさ雪の上にさゆる冬の御月

点者仲濱政模

1355 雪つもる山にいつる月影やなかめゆる程に寒くなゆさ

大正二年二月三日付「新報」第四八六五号

琉歌研究会

煙草 兼題 比嘉賀徳 仲濱政模共撰

一 上間正才

朝夕そひならて放さらぬものやしほらし句立ゆるあやめたはこ

二 上間正才

白梅の句に心引かされて竹の葉のつゆも忘れて行ゆさ

三 川平恵許

浮世ならはしの世話も腹立もしつみゆるものや煙草さらめ

四 上間正才

富士やたけ高さ吸ゆすかとそゆるあまた御万人やはきとあやめ

五 眞榮里元璋

戯むれにまかち吹き出ちやるまき煙草今や片時もはなしくれしや

六 饒平名智寶

たはむれにまかち吹き出ちやる煙草やみらてやりしちもやみも

ならぬ

点者仲濱政模

ぬ世話もはら立も空に吹はらてこころなくさめるあやめたはこ

大正二年二月六日付「沖毎」第一七五七号

琉歌研究会

煙草 兼題

比嘉賀徳 仲濱政模共撰

一 上間正才

1363 朝夕そひならて放さらぬものやしほらし句立ゆるあやめたはこ

二 上間正才

1364 白梅の句に心引かされて竹の葉の露も忘れて行ゆさ

三 川平恵許

1365 浮世ならはしの世話も腹立もしつみゆるものや煙草さらめ

四 上間正才

1366 富士やたけ高さ吸ゆすかとそゆるあまた御万人やはきとあやめ

五 眞榮里元璋

1367 戯むれにまかち吹ちやるまき煙草今や片時もはなしくれしや

六 饒平名智寶

1368 たはむれにまかち吹出ちやる煙草やみらてやりしちもやみもな

らぬ

1369 世話もはら立も空に吹はらてこころなくさめるあやめたはこ

大正二年二月一九日付「沖毎」第一七七〇号

日曜会 十二月七日

郵便 兼題 点者伊江朝眞

仁 比嘉賀徳

1370 旅にいまいる人と文のとりやりも日数さためとて行やい着い

礼 高良睦輝

1371 雁かねに文もたのたすやむかし今やゆきかひの自由になたさ

智 高安朝常

1372 渡海ひさめやすか文も小包も日つもりのことむきやい着い

信 勝連貞

1373 四方のはてまでも文の通はしや月も日もたかぬ行ちい着い

義 當銘朝韻

1374 文のゆきかひの自由になてからやよもの国もとなりこころ

秀 久志安均

1375 飛鳥のたいんすとはぬ渡海やても文の通はしや隣りこころ

秀 知念績昌

1376 さんせんの切手文に張ておけは幾千里までも行い着い

佳 失名

1377 そらに飛ふかりのつはさよりはやくたよりおとつれやむちやい

着い

佳 松島朝京

1378 日数でもこまぬ四方の国までも文の通はしや隣りなたさ

点者伊江朝眞

1379 誰も世の中や千里ひさめても文やひと月にむちやいきちやい

大正二年二月二日付「沖毎」第一七七二号

日曜会 十二月十四日

不知在所恋 当座 点者伊江朝眞

仁 高安朝常

1380 侘としろへたつねても無蔵か行衝しら露に袖とぬらす

義 高安朝常

1381 向ていく先にたちゆる侘とすみ家たつねゆるしるへさらめ

礼 佐久本孟教

1382 侘とつれてあまかくまともて尋ても知らぬ無蔵か住家

智 名護朝直

- 1383 衾れ尋ねても行衛しら露に袖ぬらち今夜もなちゆあかち
信 名護朝直
- 1384 あまかこまともて衾れ尋ねても行衛しら露に袖よぬらち
秀 森田孟徳
- 1385 拝みふしやあても住家わにや知らぬ情けある人の知らち呉な
佳 具志頭朝重
- 1386 振別てあとや行先も知らぬいちやしたつねゆかあれか住所
点者伊江朝眞
- 1387 便り押風の匂やちやうん送れ夕むちやる辻の花の住家
大正二年二月二二日付「新報」第四八八四号
日曜会 十二月十四日
- 1388 不知在所恋 当座 点者 伊江朝眞
仁 高安朝常
- 1389 偲とするへたつねても無蔵か行衛しら露に袖とぬらす
義 高安朝常
- 1390 向ていく先にたちゆる偲と住家たつねゆるしるへさらめ
礼 佐久本孟教
- 1391 偲とつれてあまかくまともて尋ても知らぬ無蔵か住家
智 名護朝直
- 1392 衾れ尋ねても行違しら露に袖ぬらち今夜もなちゆあかち
信 名護朝直
- 1393 あまかこまともて衾れ尋ねても行衛しら露に袖よぬらち
秀 森田孟徳
- 1394 拝みふしやあても住処わにや知ぬ情けある人の知らち呉な
佳 具志頭朝重

- 1394 振別てあとや行先も知らぬいちやし尋ねよかあれか住所
点者伊江朝眞
- 1395 便り押風の匂やちやうん送れ夕むちやる辻の花の住家
大正二年二月二八日付「新報」第四八九〇号
日曜会 十二月七日
- 1396 旅にいまゐる人と文のとりやり□日数さためとて行やい着やい
義 當銘朝頼
- 1397 文のゆきかひの自由になてからやよもの国もとなりこころ
礼 高良陸輝
- 1398 雁かねに文もたのたすやむかし今やゆきかひの自由になたさ
智 高安朝常
- 1399 渡海ひさめやすか文も小包も日つもりのことむきやい着い
信 勝連貞
- 1400 四方のはてまでも文の通は□や月も日もたかぬ行ちい着い
秀 久志安均
- 1401 飛鳥のたいんすとはぬ渡海やても文の通はしや隣りこころ
秀 知念續昌
- 1402 さんせんの切手文に張ておけは幾千里までも行ひ着い
佳 山城宗得
- 1403 うらに飛ふかりのつはさより早く便りおとつれやむちやい着い
佳 松島朝京
- 1404 日数でもこまぬ四方の国までも文の通はしや隣りなたさ
点者伊江朝眞

1405 進も世の中や千里ひさめても文やひと月にむちやい着い

大正三年一月一〇日付「新報」第四九〇〇号

三六会 十二月

思 兼題

仁

淡水

1406 浅間しや恋路自由ならぬてすもしりなけな朝夕思ひつくち

義

岱山

1407 思ひこかれゆるあはれ身か心いちやしかなあれに知しほしやの

礼

松亭

1408 朝夕俤にさすはれてわ身やいらぬもの思に月日すくち

智

淡水

1409 忘れてやりともて忘草つてもよこと思み増さるあれか情け

智

松亭

1410 ままならぬものとしりなけなわ身や朝夕いたつらに思ひくたち

信

朝長

1411 浮世何事も忘る間やあすか忘ららぬものや恋の思ひ

信

貞

1412 いちも出さらぬ胸内につつて思ひこかれよるものくれしや

秀

昌壯

1413 ねてさめて思ひ一寸も忘ららぬ朝夕面影のめのをさかて

秀

盛治

1414 里と我が中やうしん鳥ころ一寸もはなれは思ひくたち

秀

盛治

1415 思ひ焦りてもいちや出さらぬ義理の世の中とももらみゆる

秀

貞

1416 思ひ身につつていちや出さらぬ朝夕胸内や炭のこかり

追吟

當銘大人

1417 思ひみたれは月はなのいろも哀いやましゆる種子となゆる

大正三年一月一二日付「新報」第四九〇二号

三六会

一月六日

新年興 当座

仁

昌壯

1418 歌や三味線に躍り羽しちゆてかにも嬉さめ年の初め

義

朝睦

1419 新玉の年やいつよりもまさて歌や三味線の音のしけさ

礼

頑翁

1420 新玉の年に子孫寄合てくみゆる嬉しさや屠蘇のお酒

智

處如

1421 新玉の年やかん嬉しやあもの大庫理に出て躍て遊は

信

盛治

1422 新玉の年やあまこまの宿も歌や舞い遊ぶ音声はかり

秀

朝睦

1423 都から田舎とし寄や童へ歌うたて遊ぶ年の初め

秀

頑翁

1424 新玉の年の祝の御座敷もうきやかゆさ千代の鶴の舞方

秀

頑翁

1425 新玉の年や屠蘇の酒盛やひ躍り羽しちゆて百氣のへゆさ

追吟

点者

1426 新玉の年のうれしやほこらしやや御万人のましり一肝さらめ

追吟

点者

1427 道あゆむ人もめまゆ打笑てうれしさや美代の年のはしめ
追吟 点者

1428 乙女くやそろて羽根子つちあそふ我身や友よらつてかるたとな

大正三年一月一三日付「沖毎」第一七九二号
日曜会 一月四日

新年梅 兼題 点者伊江朝眞

仁 花城朝忠

庭に咲く梅の匂やわか袖につつて嬉しさやとしのはしめ

義 久志安均

1429 新玉の年にうれしや重ねたさ梅も咲き初て匂ひ立ゆひ

礼 高原松亭

窓に咲く梅の匂にうみやかゆさ新玉の年の祝の座敷

智 勢理客宗宣

1432 新玉の年のふこひ声とつれて笑て咲く梅の千代の匂ひ

信 仲濱政模

都からことしくたちぎやる梅のはつ日打迎て咲るうれしや

秀 兼濱朝珂

1434 新玉のとしに梅の花活て嬉しこと語る友と待る

秀 伊江朝薫

年のあけあけに梅の花いけてしんやきやらとほす御座の心地

秀 比嘉賀徳

1436 屠蘇の盃にしほらし匂添て庭の是の花の咲やる美さ

秀 大宜見朝隆

1437 初年と共に庭にさく梅の朝日さす方に咲る清さ

佳 翁長良才

1438 初年の祝の御座敷に向て咲出たる梅の匂のしほらしや

佳 兼島景福

1439 松と竹あはち素立たる梅のひらき年ほぎの飾りなたさ

佳 渡久山朝是

1440 新玉の年の祝の盃に梅の匂うつち吞かうれしや

佳 久志安均

1441 年のあけあけにうれしかほ見せて咲出たる梅の花の清さ

寅年の元旦にわか石嶺のなり所の池のほとりにうめの花三つ四つ
二つ咲きけるを見て

点者伊江朝眞

1442 初日さす影にうめのはつ花のしほらし匂立さ山のいほり

大正三年二月二日付「新報」第四九二二三号

三六会

寄杉祝 兼題 点者富銘大人

仁 盛治

1443 空に立ち続く杉の村立や長閑なる美代のしるしさらめ

義 淡水

1444 御かけふさい美代や宮の神杉の八千代経て苔の結ふまでも

礼 處如

1445 二葉なる杉のみそらつくまでもお掛ほさへ召うれ仰きをかま

智 昌壯

1446 見れば嬉しさや御国守る神の美社の杉の千代のすかた

信 頑翁

1447 美代やみや社の神垣の杉に吹き過る風も千代のひびき

1448 秀逸 松亭
吹風もなひらぬ御代にあふ山のほこ杉やいつも千代のすかた

秀逸 貞

吹風もなひらぬ長閑なる美代や三輪の玉杉のもたへ清さ

秀逸 處如

富士の高峯の杉よりもたかく四方に仰かれる美代の嬉しや

秀逸 昌壯

宮の氏人のきやほと嬉しさか美代に生立る杉よ見れば

秀逸 盛治

空に立ち並ぶ神山の杉や仰く我か君の千世の姿

追吟 点者

吹風もなひらぬ御代にあふさかの関のむら杉のなたるきよらさ

大正三年二月七日付「新報」第四九二八号

三六会

陽春布徳 兼題

点者當銘朝頼大人

仁 浦添朝長

1454 長閑なる春のひかりたちわたてみとり染なちやさ野辺も山も

義 淡水

春の御光や四方に立渡てもも草のみとりさちやる美さ

礼 朝睦

1456 四方吹渡る美代の春風になひく若草の色の美さ

智 淡水

1457 都から田舎残るかたないらぬ春の御光のあたる嬉口や

信 松亭

1458 嬉しさや美世の春風になひく野辺のもも草の色の美さ

1459 秀 岱嶺
積雪やとけて木草もへ出て見るもうれしさや春の野原

秀 朝睦

1460 降たる春雨に野辺も山の端もみとりさち出たる色の美さ

秀 浦添朝長

1461 四方の野も山も木草もえしけて長閑なる春の姿さらめ

秀 頑翁

1462 のとかなる美代の春風に榮る野辺のもも草や民のすかた

追吟 点者

1463 四方に照わたてはてやないぬさらめ木草いろそへる春のひかり

追吟 点者

1464 野原から山辺みとりそめなちやす長閑なる春の恵みさらめ

大正三年二月一日付「新報」第四九三二二号

日曜会

二月一日

無実名立恋 兼題

伊江朝眞大人選

仁 比嘉春株

1465 車井の水やくぬすあふなさのくみ上てとらちなくせつちやさ

義 高安朝常

1466 雨はらす間の宿とからちやすかぬゆてぬれきぬゆくせて呉ゆか

礼 比嘉賀慶

1467 はくちや屋の浜に遊たすと咎ひ浮名たつ浪のわ袖ぬらち

智 大宜見朝隆

1468 無蔵と原となりいかたれゆしゆんて恨みしや二人浮名なち

信 勝連貞

1469 実不実たつねいふる人やをらぬあてなしの無蔵に名くせつけて

1470 秀 知念柵敦
隣やるゆへと肝かなしやしゆんでなくせ立てられる百の苦し

や
秀 美里朝珍
ちゆけ隣やとふはもわねしやすかうさんかけされてももの苦

しや
佳 勢理客宗宣
与所やいひやかかる浮世てやおまぬ肝かなしやしゆんで浮名立さ

1472 佳 高江洲昌壯
浅ましや浮世根なし言の葉に花さかち浮名立て呉ため

1473 佳 眞□朝可
わみよりもまさて苦しやいや増らうさんかけられる花の童

1474 点者伊江朝眞
闇のさくひらの路つれゆしゆんでやかりゆむおやにうさんされ

1475 て
大正三年二月二五日付「沖毎」第一八二四号

日曜会 二月一日

無実名立恋 兼題 点者伊江朝眞

仁 比嘉春株

1476 義 高安朝常
車井の水やくぬすあふなさのくみ上てとらちなくせつちやさ

雨はらす間の宿とからちやすかぬゆてぬれきぬゆくせて呉ゆか

礼 比嘉賀慶

1478 智 大宜見朝隆
はくちや屋の浜に遊たすと咎ひ浮名たつ浪のわ袖ぬらち

1479 無藏と原となりいかたれゆしゆんで恨みしや二人浮名なち

1480 信 勝連貞
実不実たつねいふる人やをらぬゐてなしの無藏に名くせつけて

1481 秀 知念柵敦
隣やるゆへと肝かなしやしゆんでなくせ立てられる百の苦しや

1482 秀 美里朝珍
ちゆけ隣やとふはもわねしやすかうさんかけされてももの苦

1483 佳 勢理客宗宣
与所やいひやかひる浮世てやおまぬ肝かなしやしゆんで浮名立さ

1484 佳 高江洲昌壯
浅ましや浮世根なし言の葉に花さかち浮名立て呉ため

1485 佳 眞壁朝可
わみよりもまさて苦しやいや増らうさんかけられる花の童

1486 点者伊江朝眞
闇のさくひらの路つれゆしゆんでやかりゆむおやにうさんされ

て
大正三年二月一七日付「沖毎」第一八二六号

日曜会 二月八日

海辺興 当座 点者伊江朝眞

天 高安朝常

1487 長はまの真砂かちあさひあさひおもひわすれ貝ひろて遊は

地 山城宗蔭

1488 人 仲濱政模
うにもはまくりもひろて楽のつくれらぬものや磯のあそひ

1489 学ひ屋も今日や休み日かやゆら花のわらんちやか磯におりて
仁 阿波根朝祥

1490 風に袖とはち貝拾て遊ぶ花の思童歌もしほらしや
義 山城宗蔭

1491 布さるちひまにんにやひろて遊て立もぬかれらぬ小湾浜辺
礼 高安朝常

1492 見るもうつくしや浪にすそぬらち貝ひろてあそふ花の童
智 大宜見朝隆

1493 今日も浜おりて暮るまで遊てかなし子のつとに貝ゆとらな
信 金武正宣

1494 駒や潟原の木の下につなち貝ひろて宿のつとよすらな
秀 大山朝眞

1495 浪風も静ころはりはりとあそておもしろさ小湾浜辺
秀 大宜見朝隆

1496 小湾浜おりてわすれ貝ひろて世話こともないらん遊ぶ嬉しや
佳 大宜見朝隆

1497 うす風もすたしやしほひかりしちゆて遊てうちやかゆさ伊佐の
浜辺 秀 大山朝眞

1498 佐敷ほす崎のきとんふて遊て首里親国人に美土産あけら
佳 比嘉賀慶
点者伊江朝眞

1499 よよる年波や浜おりてなち忘れ貝とらな歌の友部
佳 比嘉賀慶
点者伊江朝眞

1500 長はまの真砂かちあさひあさひおもひわすれ貝ひろて遊は
天 高安朝常

1501 うにもはまくりもひろて楽のつくれらぬものや磯のあそひ
地 山城宗蔭

1502 学ひ屋も今日や休み日かやゆら花のわらんちやか磯におりて
人 仲濱政模

1503 風に袖とはち貝ひろて遊ぶ花の思童歌もしゆらしや
仁 阿波根朝祥

1504 布さるちひまにんにやひろて遊て立もぬかれらぬ小湾浜辺
義 山城宗蔭

1505 見るもうつくしや浪にすそぬらち貝ひろてあそふ花の童
礼 高安朝常

1506 今日も浜おりて暮るまで遊てかなし子のつとに貝ゆとらな
智 大宜見朝隆

1507 駒や潟原の木の下につなち貝ひろて宿のつとよすらな
信 金武正宣

1508 浪風も静ころはりはりとあそておもしろさ小湾浜辺
秀 大山朝眞

1509 小湾浜おりてわすれ貝ひろて世話こともないらん遊ぶ嬉しや
佳 大宜見朝隆

1510 うす風も涼しやしほひ狩しちゆて遊てうちやかゆさ伊佐の浜辺
佳 比嘉賀慶

1511 佐敷ほす崎のきとん掘て遊て首里親国人に美土産あけら
佳 比嘉賀慶
点者伊江朝眞

1512 よよる年波や浜おりてなち忘れ貝とらな歌の友部
佳 比嘉賀慶
点者伊江朝眞

大正三年二月一九日付「新報」第四九三九号

日曜会 二月八日

海辺興 当座 点者伊江朝眞